大阪市天王寺区

宰相山遺跡発掘調査報告

Ⅱ

2003年度真田山公園整備工事に伴う
発掘調査報告書

2004.3

財団法人　大阪市文化財協会

大阪市天王寺区

宰相山遺跡発掘調査報告
Ⅱ

2003年度真田山公園整備工事に伴う
発掘調査報告書

2004.3

財団法人　大阪市文化財協会

宰相山遺跡出土土器

大阪市天王寺区

宰相山遺跡発掘調査報告

Ⅱ

2003年度真田山公園整備工事に伴う
発掘調査報告書

２００４．３

財団法人 大阪市文化財協会

序　　文

宰相山遺跡は大阪市の脊梁、上町台地東斜面の裾部に位置する縄文時代早期から江戸時代に至る遺跡で、昭和13年に市営真田山プールの建設に伴って発掘調査が実施された学史的にも著名な遺跡である。宰相山という地名の由来は言うまでもなく、加賀藩の宰相・前田利常が大坂冬の陣に際して、当地に陣取ったことによるが、真田幸村の「真田出丸」とは、至近距離で対峙していたものと思われる。

また、本遺跡の東方には、縄文時代以降、河内湾から河内潟、さらに河内湖へと姿を変える水域が広がっていたことも、近時の発掘調査で裏付けられている。

今回の調査は、真田山公園東側テラスで、下水管渠の建設に先立って行われた。上町台地の東斜面を南北に90m縦断したことになる。その結果、南端で飛鳥～奈良時代の土壙や溝を検出し、弥生時代前期から奈良時代までの多量の遺物を採集することができた。本調査で得られた資料は、宰相山遺跡の全体像を理解するための一助になるだろう。

最後に、発掘調査および本書の作成にご協力をいただいた大阪市ゆとりとみどり振興局、ならびに関係各位に、深く感謝の意を表したい。

2004年３月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長　脇　田　　修

例　　言

一、本書は財団法人大阪市文化財協会が大阪市ゆとりとみどり振興局の委託を受け、2003年8月～2003年11月に天王寺区真田山町で実施した、2003年度真田山公園整備工事に伴う発掘調査(SS03－1次、SSは宰相山遺跡を示す)の報告書である。

一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市ゆとりとみどり振興局の負担による。

一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長京嶋覚、調査第1係長藤田幸夫の指揮のもと、調査課主任学芸員黒田慶一が行った。調査の面積・期間は第Ⅱ章第1節に記す。

一、本書の作成は京嶋・藤田の指揮のもと、黒田が2003年11月18日～04年3月31日に行ったが、一部連絡調整担当課長田中清美、調査第2係学芸員小倉徹也・平井和が執筆した。英文要旨作成はケンブリッジ大学大学院生の中西裕見子氏にお願いした。

一、基準点測量はアジア航測株式会社に委託した。

一、遺構写真は黒田が撮影し、遺物写真の撮影は阿南辰秀氏に委託した。

一、木製品の樹種同定は大阪府文化財センター山口誠治氏の御教示を得た。記して感謝の意を表する。

一、発掘調査で得られた遺物・図面・写真などの資料は、すべて当協会が保管している。

一、本書に掲載した石器遺物は、大阪市文化財協会での石器整理番号である登録番号で管理されている。各石器遺物の登録番号は、本文で使用した報告番号の前に、03YCを付加したものとする。

例：報告番号168の場合は03YC168。

一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には、補助員諸氏の援助を得た。深く感謝の意を表する。

凡　　例

1．遺構名の表記は、建物(SB)、溝(SD)、土壙(SK)、その他(SX)の分類記号の後に3桁の数字を付しているが、100番台は近世・近代であり、200番台は古代で、下2桁は通し番号である。

2．遺物には本書での通し番号を順に付した。

3．水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±○mと記した。また、挿図中の方位は座標北を示し、座標値の記載のあるものは世界測地系に基づく国土平面直角座標(第Ⅵ系)の値である。

4．本書で用いた地層の土色および土器の色調は[小山正忠・竹原秀雄1967]にしたがった。

5．本書で頻繁に用いた土器編年や器種分類は次の文献に拠っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をその都度提示することは割愛した。古墳・飛鳥時代の須恵器(MT85型式まで)：[田辺昭三ほか1981]、飛鳥・奈良時代の土器：[古代の土器研究会1992]・[佐藤隆2000]。

本 文 目 次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章　宰相山遺跡の調査概要 …… 1
　第1節　遺跡の立地と歴史的景観 …… 1
　第2節　宰相山遺跡の既往調査 …… 4

第Ⅱ章　調査の結果 …… 5
　第1節　調査に至る経緯と経過 …… 5
　第2節　層序と各時代の遺構・遺物 …… 7
　　1）層序とその遺物 …… 7
　　2）古代の遺構と遺物 …… 8
　　3）近世の遺構と遺物 …… 27
　　4）近代の遺構と遺物 …… 33

第Ⅲ章　遺構と遺物の検討 …… 35
　第1節　遺物から見た宰相山遺跡の原始・古代 …… 35
　第2節　近代の景観 …… 37

引用・参考文献 …… 39

あとがき・索引

英文目次・要旨

原色図版目次

南調査区南端の古代遺構

SD201完掘状況(東から)

古代遺構断面(北から)

図 版 目 次

1 北調査区の遺構

上：全景(北から)

中：SK101(北西から)

下：坪掘り1(西から)

2 南調査区の遺構(1)

上：全景(北から)

中：SD201・202・SK203断面(北から)

下：SK201・SD202など(南から)

3 南調査区の遺構(2)

上：SK201花崗岩出土状況(南から)

中：SD201完掘状況(東から)

下：SD201舟形木製品出土状況(東から)

4 南調査区の遺構(3)

上：SD108木組み遺構(東から)

中：SD107・108(東から)

下：SD104～106(東から)

5 南調査区の遺構(4)

上：SK105(東から)

中：SK105中央(東から)

下：騎兵連隊時代の全景(中央にSB101、北から)

6 SD201出土遺物(1)

7 SD201出土遺物(2)

8 SD201とSK203出土遺物

SD201:33・42～44・46、SK203:153・156・159

9 SD201出土遺物(3)

10 SD201出土遺物(4)

11 SD201出土遺物(5)

12 SK201出土遺物(1)

13 SK201出土遺物(2)

14 SK201出土遺物(3)

15 SK201出土遺物(4)

16 SK201出土遺物(5)

17 SK203出土遺物

18 その他の遺構出土遺物

SD202:164～167、SK102:205、

SK105:209・212・214～216

19 石器類

SD201:168～170・172、SK203:173、SK105:171

挿 図 目 次

図1　宰相山遺跡の位置図 …… 1
図2　周辺の遺跡分布図 …… 3
図3　宰相山遺跡と今回調査地 …… 5
図4　トレンチ配置図 …… 6
図5　SS03－1模式柱状図 …… 7
図6　南調査区南端断面図 …… 7
図7　第2b・2d層出土土器 …… 8
図8　遺構配置図 …… 9
図9　SD201平面図 …… 10
図10　SD201出土土器(1) …… 12
図11　SD201出土土器(2) …… 13
図12　SD201出土遺物 …… 14
図13　SD201出土舟形木製品 …… 15
図14　古代遺構平面図 …… 16
図15　南調査区南端　古代遺構断面図 …… 17
図16　SK201出土土器(1) …… 19
図17　SK201出土土器(2) …… 21
図18　SK201出土土器(3) …… 22
図19　SK203出土土器 …… 23
図20　SD202出土土器 …… 24
図21　石器類 …… 25
図22　瓦塼類 …… 27
図23　SD105・107・108出土遺物 …… 28
図24　SD107・108平面図 …… 29
図25　SD108出土部材 …… 29
図26　SK102・105出土遺物 …… 30
図27　SK105出土土器 …… 30
図28　北調査区遺構断面図 …… 31
図29　南調査区遺構断面図 …… 32
図30　SB101平面図 …… 33
図31　近代の陶磁器 …… 33
図32　調査地周辺の近代変遷過程 …… 38

表 目 次

表1　調査地の層序 …… 8
表2　石器一覧表 …… 25

第Ⅰ章　宰相山遺跡の調査概要

第１節　遺跡の立地と歴史的景観

宰相山遺跡は昭和13(1938)年、大阪市営真田山公園のダイビング・プール建設中に発見された[平林悦治1938、戸田秀典2004]。当遺跡は大阪市を南北に貫く上町台地の東斜面からその裾野にかけて位置し、北西約１㎞には難波宮跡が、また、北約１㎞には縄文時代貝塚のある森の宮遺跡が存在する。

上町台地の東方には、縄文時代早期になって形成された河内湾が広がっていた。河内湾は縄文時代を通じてしだいに河内潟へ、弥生時代には河内湖へと変遷していった[梶山彦太郎・市原実1986]。

上町台地北部の当遺跡周辺では、これまで旧石器時代の遺物は確認されていない。上町台地南部の山之内遺跡では剥片などが数点確認され[大阪市文化財協会1998]、東の瓜破台地上では長原遺跡・瓜破遺跡、八尾市八尾南遺跡で旧石器が出土している。特に長原遺跡では平安神宮火山灰層より下層から旧石器が見つかり、２万数千年前に比定されている[趙哲済1991]。

縄文時代早期には当遺跡の既調査で押型文土器(高山寺式)が出土し[松尾信裕・積山洋1996]、同じ上町台地東縁部では勝山遺跡から、早期末～前期初頭に比定される粟津SZ式の土器片が見つかっている[松本百合子1991、高井健司・松本1991]。河内湾周辺の遺跡としては、北河内丘陵上の交野市神宮寺遺跡・枚方市穂谷遺跡、生駒西麓の東大阪市神並遺跡などが挙げられ、縄文海進がピークに達する縄文時代前期の遺跡としては、笠面市瀬川遺跡・高槻市柱本遺跡・東大阪市鬼虎川遺跡・八尾市恩智遺跡などがある。

縄文時代中期には当遺跡と森の宮遺跡において船元Ⅱ式の土器が見つかっており[難波宮址顕彰会1978、大阪市文化財協会1996]、森の宮遺跡においても集落の形成が開始される。摂津では豊中市野畑遺跡が、河内湾の周囲では寝屋川市讃良川遺跡・東大阪市縄手遺跡・同馬場川遺跡などが新たに出現する。長原遺跡でも船元式土器が見つかっており、瀬戸内系土器文化圏に属していたと考えられている。

縄文時代後期に入ると淀川・大和川の沖積作用によって河内湾の埋没が進み、ヒトの低地への進出が加速するのか、遺跡数も飛躍的に増える。森の宮遺跡では貝塚の

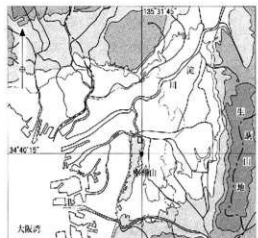


図1　宰相山遺跡の位置図

形成が始まる。

さらに沖積が進んだ縄文時代晩期には河内潟は淡水化しはじめ、遺跡数は増加し、河内平野にも多くの遺跡が見られるようになる。大阪市域で晩期の土器を出土する遺跡は、森の宮遺跡を始め長原遺跡・瓜破遺跡・瓜破北遺跡・喜連東遺跡が挙げられる。森の宮遺跡では貝塚はセタシジミを主体とするものに変化する。長原遺跡では晩期最終末の長原式土器に籾痕をもつものがあり、稲作が到来した時期を示唆するものである。しかし同時期には石棒・土偶などの縄文文化の伝統を強く留めた遺物も出土する[大阪市文化財協会1983]。

弥生時代になると上町台地上にも多くの集落が営まれるとともに、水稲耕作の普及に伴って河内平野などの低地に集落が増加する。大阪市域では森の宮遺跡・桑津遺跡・山之内遺跡・遠里小野遺跡・瓜破遺跡・長原遺跡に前期の土器がある。また、淀川の自然堤防上に立地する森小路遺跡でも前期の土器片が少量であるが出土している。

中期にはいよいよ多くの遺跡が見られ、上町台地北部では大坂城跡下層、台地西側沖積地の大坂城下町跡の船場地域でも弥生土器片は出土している。また、上町台地の北に続く長柄砂洲上には中期中葉に同心町遺跡[黒田慶一1998]が、中期後葉から崇禅寺遺跡が営まれ始める。森小路遺跡でも集落が本格的に営まれるのは中期前葉からである[大阪市文化財協会2001]。市域の上町台地上では桑津遺跡・山之内遺跡・遠里小野遺跡、河内平野では東大阪市鬼虎川遺跡・八尾市亀井遺跡などの同地域の中核集落が出現し、加美遺跡や東大阪市瓜生堂遺跡では大型墳丘墓が営まれ、有力な家族集団が出現したと考えられている。

後期になると森の宮遺跡では出土土器量が減少し、桑津遺跡・山之内遺跡・遠里小野遺跡でも遺物がほとんど出土せず、森小路遺跡でも後期の遺構は見つかっていない。弥生時代の後期になって消滅・衰退する集落がある一方で、長原遺跡・崇禅寺遺跡・大坂城下町跡船場地域など、規模が拡大する集落や新生の集落が登場する。

加美遺跡では庄内式、布留式期の周溝墓群が見つかっている。そこでは九州・山陰・山陽・東海といった各地方の土器だけでなく、朝鮮半島の土器も運び込まれており、地域間交流進展の様子を知り得る。

上町台地上の前方後円墳は、御勝山古墳・帝塚山古墳の２基しか現存しない。しかし難波宮跡からは、埴輪片のほかに三輪玉や滑石製の臼玉、金環などの古墳の副葬品と考えられる遺物が出土し、大坂城跡の調査でも埴輪片や滑石製合子が見つかっている。『日本書紀』白雉元年10月条に、「宮地に入れるがために、丘墓を壊され、および遷されたる人には物を賜うこと、各差有り」の記事が伝える難波宮造営に伴う古墳破壊が、考古学的に裏付けられたことになり、上町台地にもかつて古墳群が形成されていたと推定される。

難波宮跡下層からは５世紀後半の大規模な倉庫が16棟以上見つかっている[大阪市文化財協会1992]。５世紀前半に大川が難波堀江として開削されたことにより上町台地北部は急速に政治経済において発展し、さらに所在地については諸説あるものの海上交通の中心たる難波津が付近に存在した。難波の地は対外交渉の拠点としても繁栄したのである。

飛鳥時代には四天王寺が創建され、当地南約1kmの細工谷遺跡では台地上の開発が開始され、付近に百済王氏の氏寺である「百済尼寺」が存在したようである［大阪市文化財協会1999］。さらに孝徳朝に難波長柄豊碕宮（前期難波宮）が造営され、奈良時代の聖武朝に難波宮は陪都（後期難波宮）として再建され、一時首都にもなる。

室町時代末、蓮如による石山御坊建立によって当地周辺は再び脚光を浴びる。石山御坊から発展した大坂本願寺の位置については、現在の大阪城説が有力である。天正11（1583）年の豊臣秀吉大坂城築城以後は、文禄3（1594）年に始まる惣構の建設によって、当地は惣構［大阪市文化財協会2002］の外縁部に位置したが、大坂冬の陣（1614年）に先立って、真田幸村が真田の出丸を当地の近接地（現、大阪明星学院の地といわれる）に築いたことから、加賀藩の宰相・前田利常がそれに対峙するように「篠山」に陣取り、その由緒から「宰相山」の地名が生まれたといわれる。（黒田）

図2　周辺の遺跡分布図

第２節　宰相山遺跡の既往調査

昭和13(1938)年遺跡発見時の遺物のほとんどは、戦災によって失われたようである[戸田秀典2004]。続く本格的発掘調査は平成７(1995)年、市営プールの造替に先立って当協会が行い、縄文時代早期の土器から近世に至る遺構・遺物が見つかった。その成果について紹介したい。

飛鳥時代の生活面で、礎石建物１棟と掘立柱建物１棟を検出した。両者は南西から北東に貫く谷をはさんで北と南の高台に立地する。礎石建物は桁行・梁行とも３間(5.0m×4.5m)の総柱で、礎石は丸く土壙状に掘込んで据えられている。礎石は30～40cm大で、北西隅の礎石抜取り穴から７世紀末の土師器が出土した。大型で古い形態の土馬も見つかった[積山洋1998]。

その下層にも飛鳥時代の遺構面があり、木樋と正東西をとる溝が出土した。その時期は７世紀中ごろ以後と考えられ、前期難波宮建設以後の周辺整備に伴う遺構と思われる。礎石建物や木樋は正方位ではなく斜行方位をとるのは、この調査地の地形が谷の急斜面に位置するからであるが、本遺構面の正東西の溝は、「難波京」の造営と関係する可能性がある。

谷地部の上記遺構面下層の黒色粘土層は、河内湖に関わる堆積物と見られ、当地が河内湖縁辺の湿地帯の環境であったことを示唆する。出土遺物として縄文時代晩期の突帯文土器、弥生土器(前期～後期)のほか、古墳時代前期の土師器はあるが、須恵器はない。

その下層の厚い水成砂層の沖積層(鮮新世)は２層に分かれ、上部層は生物攪乱が著しく海浜の汽水成層と見られ、本層中にごく部分的ながらアカホヤ火山灰と推測される火山灰層が認められた。下部層から縄文時代中期の船元Ⅱ式土器が出土し、河内潟に関わる堆積と推定され、さらに下層は縄文海進による河内湾の時代の堆積と考えられる。

谷地底部の地山は固結した粗粒砂の上町層で、その直上に河成層が堆積し、本格的な海進による海水進入以前の古い層準と考えられる。本層からは高山寺式の縄文土器が出土した。

これらの各層から出土した縄文土器は、少量ながらさほど磨滅しておらず、周辺の台地部で人が生活していた可能性を示している。また、森の宮遺跡より年代が遡る縄文土器の出土は、縄文時代の上町台地像に新知見をもたらした。

平成14年にも真田山公園内で調査が行われ、飛鳥時代の完形の木製鋤が出土するなど多大の成果を上げたが、本書と同時に刊行される『宰相山遺跡発掘調査報告』Ⅰに収録されるから、それに換られたい。

(黒田)

第Ⅱ章　調査の結果

第１節　調査に至る経緯と経過

大阪市天王寺区真田山町の真田山公園一帯に所在する宰相山遺跡では、縄文時代早期から近世に至る各時代の遺構・遺物が検出される。

大阪市ゆとりとみどり振興局では、この真田山公園の東側テラスにおいて、園地広場整備、雨水排水整備(貯留槽整備など)、擁壁整備、フェンス設置など、公園造成を計画した。大阪市教育委員会が平成15年５月29日に施工区域の南端２個所で試掘調査を行ったところ、地下1.9mで地山に達し、その上面に層厚0.5mの須恵器・土師器を多量に含む古代の包含層が存在し、試掘地南側に深さ0.8mの溝状遺構があることも判明したので、下水管渠布設予定地で本調査を実施することとなった。南側のカルバート設置の35m区間は幅６mで、北側の55m区間は幅2.5mで調査を行ったが、前者が終了後、まずカルバート施工を優先させることから、調査を一時中断して、カルバート施工終了後に後者の調査を行うこととした。調査面積は合計348㎡である。

発掘調査は2003年８月18日から南調査区より開始したが、同調査区は９月17日終了した後、10月23日に再開の上、北調査区で掘削を開始した。その間９月９日に委託した基準点測量が行われた。11月17日、現場でのすべての調査を終了し、資材を撤収した。　(黒田)

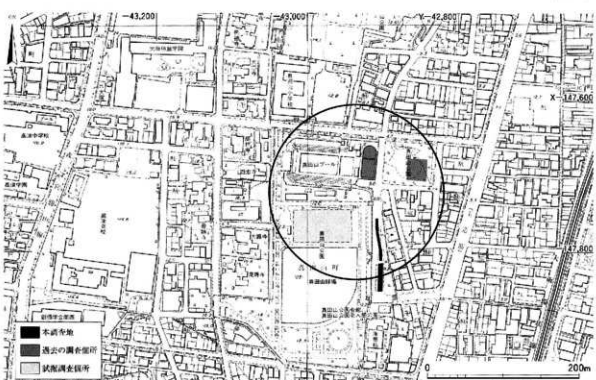


図3　宰相山遺跡(埋蔵文化財包蔵地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001])と今回調査地

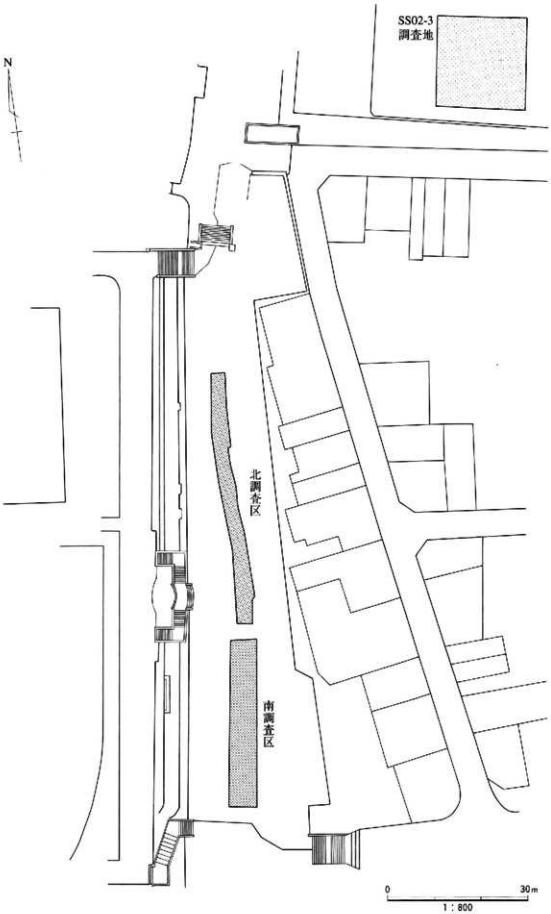


図4　トレンチ配置図

第２節　層序と各時代の遺構・遺物

１)層序とその遺物(図５～７、図版１、表１)

部分的な坪掘りを含め、現地表面下約３ｍ(TP+4.8m)までの地層を観察し、検討を行った(表１)。以下に各層の層相やその特徴を記す。

第０層：現代盛土層および攪乱層で、層厚は平均30cmである。

第１層：明黄褐色シルト、灰色極細粒砂、黄橙色細粒砂、灰色シルト混り極細粒砂～シルト、黄橙灰色細粒砂などが互層となった盛土層である。層厚は50cm以下であり、上面でSB101を検出した。本層からは伊万里焼が出土しており、近世と考えられる。

第２層：黄灰色粗～極粗粒砂、暗灰色中～粗粒砂質シルト、灰色極細粒砂、黄橙色細～極細粒砂と灰色シルトの互層、暗色化した粗～極粗粒砂混りシルトなどのブロックからなる。地すべりや崩落などの斜面崩壊によって形成された崩積土層と考えられる。地層が累重した状態で側方へ連続することと、ブロックの境界に引きずりによるものと考えられる変形構造が観察されたことから判断した。本層と下位の第４層との境界は、調査区北側ではTP+6.4mで認められたが、中央部から南側ではそれぞれTP+5.4mおよび、TP+4.8mであり確認できなかった。崩積土層は南側ほど深く厚くなっていると推定される。上面でSK105を検出した。本層からは古代の須恵器、土師器片が出土した。

第３層：上部は灰色ないし淡緑灰色粗粒砂混り中～極細粒砂質シルトからなり、下部は上半分が灰色シルト混り粗～極粗粒砂、下半部が灰色ないし黄灰色粗～極粗粒砂からなる。最下部は灰色粗～極粗粒砂質シルトないしシルト質粗～極粗粒砂からなる。上部、下部ともに塊状で上方へ細粒化する。上部と下部の境界には明瞭な層理面が見られるが、下部と最下部は不明瞭で漸移的である。下位層とは明瞭な層理面で境される。上部・下部および最下部を合わせた層厚は平均60

図５　SS03-1模式柱状図

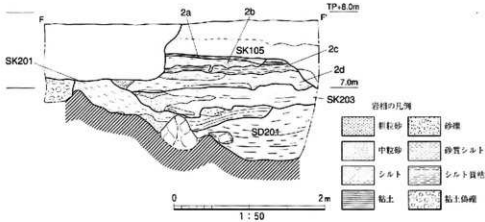


図6　南調査区南端断面図

表1　調査地の層序

SSU3-層序			岩相	土色	粒度(mm)	出現堆積速度	遺構	おもな遺物	時代
沖積層	現代	第3層	現代盛土および現表層	―	表土				
	新期	第1層	褐灰粘質シルト、灰色植物腐植、黄橙色鉄斑粘土、灰色シルト質中粒植物腐植シルト、黄橙灰色鉄斑粘土（盛土層）	2.5Y 4/3 5Y 3/1	表土		←SK101S-2		近世
							←SK105S-2		
	古期	第2層	黄灰色粗～極粗粒砂、暗灰色中～粗粒砂質シルト、灰色褐鉄斑粘土、灰橙色細～極細粒砂／灰色シルト互層（砂礫土層）	5Y 4/2 2.5Y 4/3 5Y 5/3	表土～粘土	粗製須恵器			古代
中位段丘構成層	上位段丘	第3層	a 上層：黄～黄褐灰色 鉄斑粘土質中～極細粒砂質シルト（上方細粒化） 下層：黄灰色 粗～極粗粒砂／灰色 シルト質中粗～極粗粒砂（上方細粒化） （最下部：灰色 粗～極粗粒砂質シルト・シルト・緑色～極粗粒砂）	5Y 6/3	表土～粘土		←SK201,SK202,SD202		弥生時代
			b 灰色シルト～粘土	5Y 5/3	表土				

←上限検出遺構

図7　第2b・2d層出土土器

cmである。中位段丘構成層に当る。

1は第2b層出土の口径10.6cmの須恵器杯、2は第2d層出土の土師器把手である。1は難波Ⅳ古段階と思われる。　（小倉・黒田）

2）古代の遺構と遺物（図9～22、表2、図版2・3・6～19）

南調査区南端でSD201・202、SK201～203が重複して検出された。切合い関係から古新はSD201・SK202→SK201→SK203→SD202の順と考えられる。

SD201は幅1.4～2.4mの西から東へ流れる溝で、深さは0.8mを測り、地山面には激しい水流による幅0.2m、深さ0.2mの深い溝が刻まれている。溝内は砂礫で埋没しているが、この上にはシルト～粗粒砂が互層となった薄層が、さらに、上部に黒褐色粘土質シルト～粘土混り粗粒砂が堆積している。舟形木製品をはじめとする弥生時代から飛鳥時代に至る遺物と、六甲山系の花崗岩である桃色カリ長石を含有する黒雲母花崗岩や砂岩、石英斑岩、結晶片岩の自然石が出土した。

本遺構では弥生土器3～12、韓式系土器13～17、製塩土器19・20、円筒埴輪18、須恵器21～50、古式土師器60、土師器51～67・70をはじめ、石製品68・69、土錘71・72、鉄滓73・74など、弥生時代から古代に属する多岐に渡る遺物が出土した（図10～12）。しかし、これらのうち、遺構の時期を示すものは後述するような飛鳥時代に属するものであり、これ以外のものは混入品と思われる。ここでは時期を追って遺物の特徴を記述する。

3は甕頸部、4・5は壺頸部の破片である。3は4条、4は4条一単位、5は3条のヘラ描き沈線文がある。6は口縁部が大きく開いた甕で、頸部の直下にキザミを入れた突帯文がある。体部の調整は内外面ともナデである。胎土中に1～2mmの石英・長石・チャート粒を含む。7は口縁部が緩やかに開く甕で、調整は器面が摩滅しており明らかでない。8は口縁部が大きく開く壺で、口縁部の外端面にヘラ描きの斜格子文がある。調整は器面が荒れており、明らかでない。9は口縁部および頸部に強いヨコナデを施した甕で、口縁端部をつまみあげており、体部の調整は内外面ともナデである。10は口縁部が水平に開く甕で、端部は丸い。器面が荒れており、調整は不明である。9・10はともに胎土中

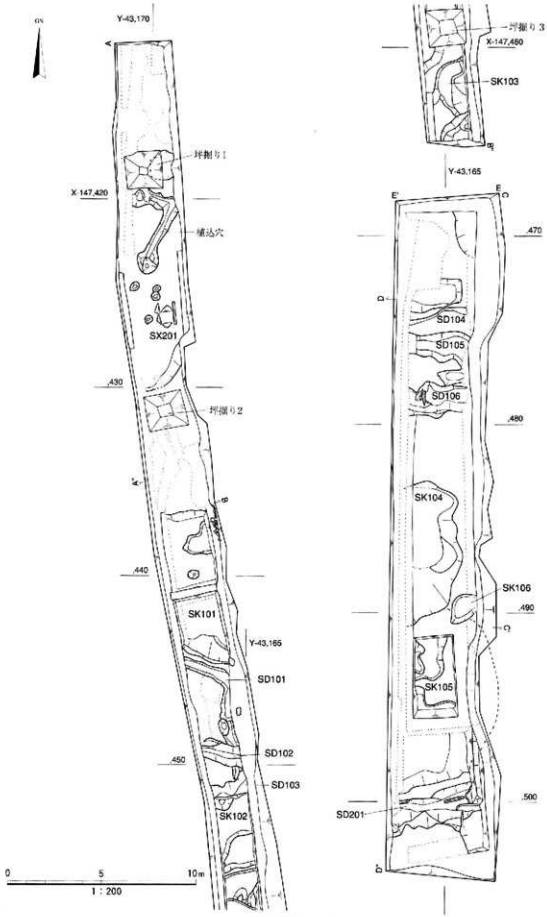

GN
Y-43,170
坪掘り1
X-147,420
埋込穴
SX201
.430
坪掘り2
.440
SK101
Y-43,165
SD101
.450
SD102
SD103
SK102
0
5
10m
1 : 200
坪掘り3
X-147,460
SK103
Y-43,165
.470
SD104
SD105
SD106
.480
SK104
SK106
.490
SK105
SD201
.500

図8　遺構配置図

に角閃石粒を含む生駒西麓産の土器である。11・12は器体がわずかに内湾する高杯の杯部あるいは鉢の体部片である。ともに口縁端部を左右に肥厚させており、外面に11は３条、12は６条の凹線文が巡る。色調はにぶい黄橙色で、胎土中に長石・石英を含む。以上の遺物の時期は3～6は弥生時代前期末葉、7は中期中葉、8は中期前葉、9～12は中期後葉に属するものである。

13～17は韓式系土器の体部片である。13は器表面を約３㎜の格子タタキで整形した色調が暗灰色を呈する瓦質土器である。丸底壺の体部片と思われる。14は器表面を３㎜前後の格子タタキで整形した軟質土器で、色調は灰黄褐色を呈する。外面に煤が付着しており、平底鉢あるいは甕の体部片と思われる。15は器表面を２㎜×５㎜の長方形タタキで整形した軟質土器である。色調は浅い黄橙色を呈する。16は器表面をやや粗い縄席文タタキで整形した陶質土器で、色調は明赤褐色を呈し、焼成は良い。タタキの重なり状況や器壁からみて壺の体部片の可能性がある。17は器表面を２㎜×２㎜の格子タタキで整形した後、横方向のナデを施している。色調は灰黄褐色ないしは黄橙色で、焼成は良い。以上は５世紀代に属するものであろう。

18は円筒埴輪の体部片で、外面にはタテハケの後に断面台形のタガを貼り付けている。色調はにぶい橙色で、焼成は窖窯によっている。５世紀中葉に属するものであろう。

19・20は口径4.4～５㎝である。前者は器体の外面を平行タタキで、後者は縦方向にナデ整えている。内面の調整はナデで、色調はともに浅い黄橙色である。５世紀後葉に属するものである。

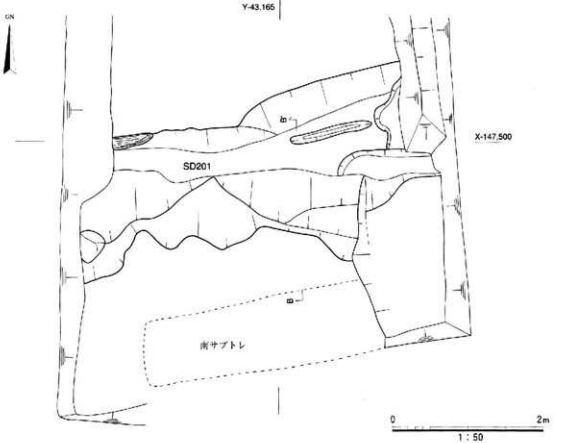


図９　SD201平面図

21～23・27～29・35～38は杯蓋である。いずれも口縁部と天井部の境界には明確な稜がある。口縁端部は内傾して浅く凹むものが多い。天井部の形態は平らな21、丸味のある28・29・37などがあり、前者は後者に比べて天井部のヘラケズリの範囲が広い。以上の色調は灰色を基調としており、焼成は良好である。24～26・30～32は杯身である。口縁部の立上がりは24・25・30は内傾しており、26・31は直立ぎみにおさめている。口縁端部を丸くおさめる30以外は、内傾して浅く凹む。32は口径約10cm、器高4.1cmに復元された杯身で、立上がりは内傾しており、口縁端部は丸い。器体は釜形状を呈しており、底部の約1／3を静止ヘラケズリで調整している。33は高台径8.8cmの台付壺の底部である。高台は外方に踏ん張っている。色調は灰色で、焼成は良い。39・40は無蓋高杯である。39は緩やかに開く口縁部の下端に1条の突帯があり、杯底部をヘラケズリ調整している。40はわずかに開く口縁部と体部の境界に2条の突帯と、この下に櫛描き波状文が巡る。42は口径約10cmの直口壺で、頸部には2条の突帯間に1条の櫛描き波状文を施している。器体の外面に黄灰色の自然釉が見られる。43は高杯の脚部と思われるが、底径のわりに器壁が厚いことから壺などの脚台の可能性もある。44は口径8.1cm、器高6.6cmの坩で、口縁部は玉葱状の体部から直立している。口縁端部は内傾しており、底部を静止ヘラケズリで調整している。最大径は体部にあり、ここに1条の凹線が巡る。34は口径14.4cm、器高3.1cmの杯Aで、口縁部は器体から外上方に開く。口縁端部を丸くおさめており、底部はヘラケズリ調整している。46は底部の大半を欠損した甕で、口縁部はわずかに内湾しながら開く。口縁部の外端面に2帯の櫛描き波状文が巡り、体部の中程のやや上方に円孔を穿つ。色調は灰色で、焼成は良い。41は口径16.6cmに復元された壺の口縁部で、端部の下端に1条の突帯がある。口縁部の外端面に1条の櫛描き波状文が巡る。45は把手付き椀で、口縁部と体部の境界に3条の突帯、これの下方に櫛描き波状文が巡る。底部をヘラケズリ調整している。48は高杯形器台の杯部片で、口縁部の下方ににぶい2条の突帯、体部に2条の櫛描き波状文と1条のにぶい突帯が巡る。器表面に平行タタキメが残る。47は口径約22cmの甕で、口縁部は外上方に開く。口縁部の上端が浅く凹む。頸部の内面には当て具痕が残る。49は口径44.2cmの甕で、口縁部下方の2条の突帯間に2条の櫛描き波状文、これの下にも1条の櫛描き波状文が巡る。頸部近くの内外面を横方向のユビナデで整えている。50は口径45.4cmの高杯形器台の杯部で、体部の外面に2条一単位の突帯間に2条の櫛描き波状文、これの下に3条の櫛描き波状文、1条の突帯を挟んで下向きの粗雑な鋸歯文を施している。以上の須恵器のうち、杯身32、甕46、高杯形器台50はTK216型式～ON46段階、杯蓋21・22・35、把手付き椀45、高杯形器台48、甕49はTK208型式、杯蓋28・29・36・37・38、杯身24、無蓋高杯40、坩44、壺41はTK23型式、杯蓋23・27、杯身25・26・30・31はTK47型式、杯A34は継波V古段階に属するものであろう。

51～67・70は土師器である。51は水平に開いた口縁部の端部を上方に肥厚させた甕である。52・59・62は口縁端部をわずかに内傾させた布留式系の甕である。53は口縁端部を内側にわずかに肥厚させた甕で、布留式系に属するものであろう。54は口径13.8cm、器高14.5cmの丸底の甕である。口縁部は一度屈曲した後、外上方に開いており、内外面をヨコナデ調整している。体部の調整は外面が縦および横方向のハケ、内面はユビオサエの後、斜め方向のヘラケズリである。56は口縁端部を丸くお

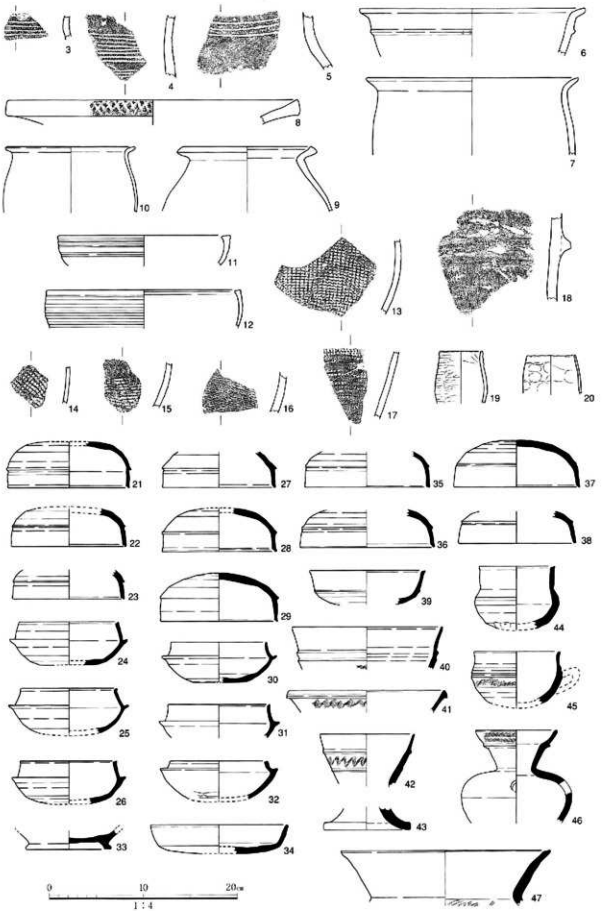


図10　SD201出土土器(1)

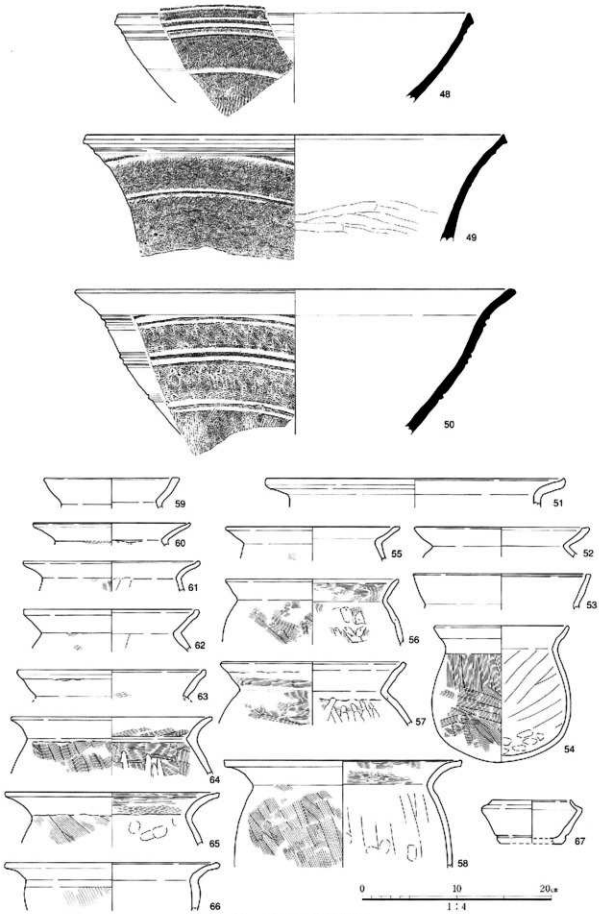


図11　SD201出土土器(2)

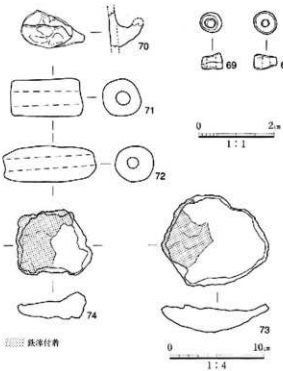


図12　SD201出土遺物

さめた甕で、口縁部の内面に横方向のハケメが残る。体部の調整は外面が左上がりのハケ、内面はハケの後、ヘラケズリである。58は口縁部が大きく外反した長胴甕と思われるもので、口縁端部を面取る。口縁部の内面を断続的な横方向のハケで整えており、体部の調整は外面が左上がりのタテハケ、内面はユビオサエおよび縦方向のナデである。

60は庄内式に属する甕で、頸部の外面を細筋のタタキで整形しており、内面の調整は横方向のヘラケズリである。色調は灰黄褐色で、胎土中に微細な角閃石粒を含む。牛駒西麓産である。57・61・63は口縁端部を丸くおさめた甕で、57の体部の調整は外面が横方向の断続的なハケ、内面は横方向のハケの後、ナデである。61は体部の外面をタテハケ、内面をヘラケズリで調整している。64は口縁端部を丸くおさめた甕で、体部の外面をタテハケ、内面を横方向のハケの後、縦方向のナデで調整している。65は口縁端部の近くに強いヨコナデを加えた甕で、口縁部の内面には横方向のハケメが残る。体部の調整は外面が左上がりのハケ、内面はユビオサエおよびナデである。66は口縁端部を丸く肥厚させた甕で、体部の外面を縦方向のハケで調整している。内面は器面が摩滅しており不明である。67は口径8.2cm、器高4.6cmで、口縁部を折り込み成形した杯である。底部は平底で、体部の下端をヘラケズリ調整しており、色調はにぶい黄橙色を呈する。以上の土師器甕の時期は古墳時代64、難波Ⅴ段階66以外は、難波Ⅲ新段階に属するものであろう。

70は舌状を呈する甑の把手である。飛鳥時代に属するものと考えられる。

71・72は直径3.8～3.9cm、長さ7.5～9.8cmの管状の土錘で、重さは前者が145.2g、後者は157.9gあり、色調はともににぶい黄橙色を呈する。胎土中に1～2mm大の長石・石英粒を含む。形態や大きさなどからみて、定置網などに使われた土錘と思われる。飛鳥時代に属するものであろう。

73・74は椀形鉄滓で、ともに器面が高温を受けて気泡化している。小鍛冶にともなうもので、飛鳥時代に属するものであろうか。

68・69は直径0.5～0.6cmで、色調がオリーブ灰色を呈する滑石製の臼玉である。ともに作りが粗雑で、紐孔の端面も水平でない。古墳時代後期に属するものであろう。以上がSD201から出土した主な遺物であるが、種類、所属時期ともに多岐に渡っている。これらの中で、遺構の時期をあらわすものとして、図化した点数は少ないものの、難波Ⅲ新段階に属するものを提示しうる。ほかの時期の遺物については当地が生活や生産の場であったことを物語る資料として位置付けられるものである。

（田中）

75は舟形木製品である(図13)。半截した丸太を刳りぬいて船槽を作った大型の丸木舟形である。船首と船尾をほぼ対称的にとがらせており、中央で割れている。とがらせた片方の先から船底にかけて焦げている。現存長75.0cm、最大幅17.0cm、厚さ1.4～2.8cm、樹種はスギ(*Cryptomeria japonica*)である。所属時期は、飛鳥時代の難波Ⅲ新段階に属するものであろう。

SK201はSD201の埋没後に掘り込まれた東西3.5m以上、南北3.0m、深さ0.9mで平面形が不整な土壙である。黒褐～灰黄褐色の粘土混りシルト～粗粒砂を含むシルトである。弥生時代から奈良時代に至る遺物をはじめ、長さ1m前後の六甲山系の桃色カリ長石を含有する黒雲母花崗岩5個と砂岩、チャート、結晶片岩、緑色片岩、玄武岩質安山岩などの自然石が出土した。　(黒田)

須恵器76～102・104～106、土師器103・107～143が出土した(図16～18)。以下、須恵器から順を追って記述する。

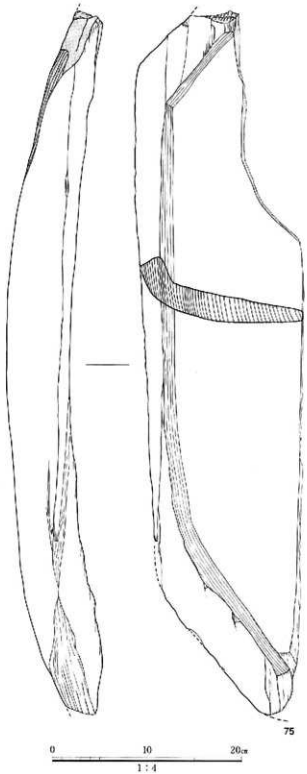


図13　SD201出土舟形木製品

76は口縁部と体部の境界の稜が突出した口径14.2cm、器高5.2cmの有蓋高杯の蓋である。天井部の2／3をヘラケズリ調整しており、中央には逆台形のつまみがある。77は口縁部と体部の境界ににぶい凹線が巡る口径15.0cm、器高4.0cmの杯蓋である。口縁端部は内傾し、天井部の約1／3をヘラケズリ調整している。78は受け部以下を欠損した杯身で、立上がりはやや内傾している。79は口径11.6cm、器高約5cmに復元された杯身である。立上がりおよび口縁端部はやや内傾しており、体部の約1／3をヘラケズリ調整している。80は口径9.0cm、器高3.0cmの杯Gである。口縁端部は内傾しており、底部はヘラ切り未調整である。81・82はともに口縁部が外上方に開く杯Aで、前者は口径10.1cm、器高2.9cmある。底部はともにヘラ切り未調整である。83は口径12.0cm、器高4.5cmの杯Bである。口

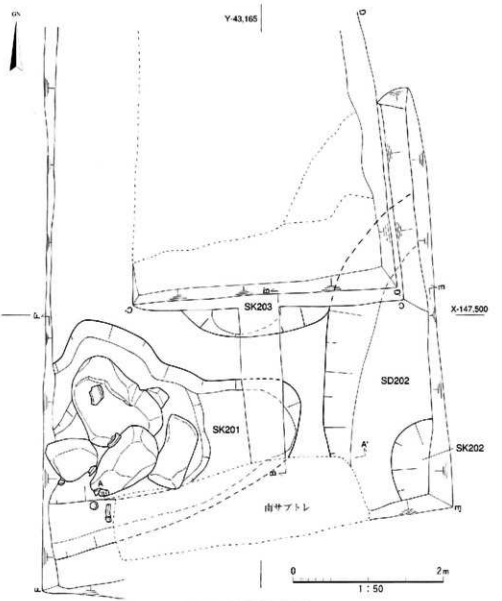


図14　古代遺構平面図

縁部の上端を短く外反させており、体部はやや丸味をもつ。高台は大きく外に踏ん張る。84は口径9.6cmの杯蓋で、口縁端部はわずかに内傾している。天井部はヘラ切り未調整である。85は口径9.0cm、器高2.8cmの杯G蓋で、短いかえりが口縁部からやや内側につく。天井部の約2／3をヘラケズリ調整しており、中央には背の低い宝珠つまみがつく。86・93・94は杯B蓋でいずれも天井部の大半を欠損しており、口縁部は天井部から下方に短く伸び、天井部の2／3近くをヘラケズリ調整している。87は口径17.8cmの口縁部が体部から屈曲して開く皿である。口縁端部を丸くおさめており、器体の内外面をヨコナデ調整している。88も口径18.8cmの皿で、口縁部はわずかに開く。調整は底部の外面がヘラケズリで、口縁部の内外面はヨコナデである。89・90・92は杯Bの体部片である。いずれも高台を底部に貼付けており、89以外は高台径が大きい。92の底部の裏面はヘラケズリ調整している。91は器壁からみて台付壺の底部片と思われるのもので、高台は外方に開く。95～99は口径19.0～24.2cmで、口縁部が外上方に開く甕である。口縁端部を95・97・98は丸く、96は上下に肥厚させており、99は玉縁状に、98の口縁部の下端には1条のにぶい凹線が巡る。97～99は体部外面を平行タタキの後、カキメ調整している。以上の体部内面には当て具痕が残る。100は高杯の脚部片で、櫛描き波状文を巡らせた後、4方にスカシ孔を穿つ。101は器台の脚部と思われる破片で、脚端部を内に肥厚させており、外端面に

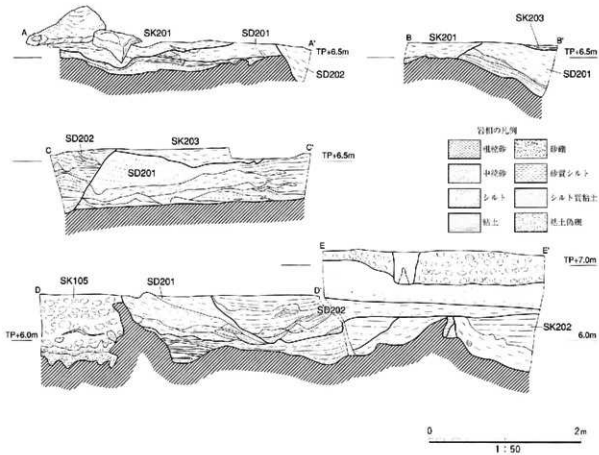


図15　南調査区南端　古代遺構断面図

は上下2段に刺突文が巡る。102は体部の下半以下を欠損しているが、体部が丸味をもつ鉢とみられるものである。口縁部は体部から短く開いており、端部は丸い。体部の中程以下をヘラケズリ調整している。104は口縁部を欠損した広口壺で、底部には外方に開く貼付け高台がある。最大径は体部の中程近くにあり、これより以下をヘラケズリ調整している。105も広口壺と思われるもので、最大径は体部の中程にあり、器体の内外面をヨコナデ調整している。106は底径10.5cmの壺の底部で、器体の調整は外面がヘラケズリで、内面はヨコナデである。胎土中に長石・石英粒を含んでおり、三国時代後半の百済系の陶質土器に酷似している。

103は移動式竈の袖の破片である。器面の調整は外面がハケ、内面はユビオサエおよびナデである。色調はにぶい橙色で、胎土中に長石・石英粒を含んでおり、在地産と思われる。

107は円筒埴輪の基部で、器面の調整は外面がハケ、内面はユビナデである。基部の内面を板状工具を用いて掻き取っている。色調はにぶい橙色で、胎土中に1mm前後の長石・石英粒を多く含む。

108は口径13.0cm、器高2.4cmの口縁端部を丸くおさめた皿Aで、内面には放射状の暗文がある。109は口径12.0cm、器高2.4cmの口縁端部を丸くおさめた杯Cで、底部の外面をヘラケズリ調整している。内面には上半に左上がりの暗文が、見込みにらせん状暗文がある。110は口径18.0cmの皿Aで、口縁部は一旦屈曲した後で短く開く。口縁端部を丸くおさめており、体部の内面に放射状の暗文がある。底部の外面をヘラケズリ調整している。111は口径19.4cm、器高2.9cmの皿Aで、口縁端部は丸い。底

部の外面をユビオサエの後、ヘラケズリ調整している。112は口径21.0㎝の皿Aで、口縁端部を丸くおさめており、体部の内面には放射状の暗文がある。底部の外面をヘラケズリ調整しており、体部の外面には粗い横方向の暗文がある。113は口径21.8㎝、器高約3㎝の皿Aで、口縁部は体部から屈曲して開く。口縁端部を丸くおさめており、体部の内面には放射状の暗文がある。器体の内外面の調整はヨコナデ、底部はナデである。114は口径21.4㎝の皿Aで、口縁端部は丸い。器体の調整は内外面ともヨコナデである。115は口径24.2㎝の皿Aで、口縁部は体部から屈曲して開く。底部の外面はユビオサエの後、ナデ整えている。116は口径22.9㎝、器高2.8㎝の皿Aで、口縁部はわずかに屈曲して開く。口縁端部を丸くおさめており、底部外面をヘラケズリ調整している。体部の器面調整は外面がヨコナデ、内面は器面が剥落しており不明である。117は口径15.4㎝、器高3.9㎝の杯Cで、口縁端部は丸い。体部の内面には放射状の暗文があり、底部の外面をユビオサエで整えている。118は口径14.9㎝、器高5.3㎝の杯Aで、口縁端部は丸い。体部の内面には2段の放射状の暗文がある。119は口径12.8㎝の高杯の杯部か杯Cと思われるもので、口縁部がわずかに開く。口縁端部は丸く、器体の内外面の調整はヨコナデである。120は口径17.4㎝、器高3.8㎝の皿Aで、口縁部は体部からわずかに屈曲して開く。体部の内面に粗い放射状の暗文がある。器体の調整は底部がユビオサエの後、ヨコナデ、体部は内外面ともにヨコナデ調整である。121は口径19.6㎝の皿Aで、口縁部は体部から屈曲して開き、口縁端部を内につまみあげている。体部の内面には放射状の暗文がある。122は口径20.5㎝、器高5.3㎝の皿Aで、口縁部はわずかに屈曲して開く。口縁端部を丸くおさめており、体部の内面には2段の放射状の暗文が、外面には横方向の粗い暗文がある。底部の外面に横方向のヘラケズリの後、横方向の暗文を加えている。123は口径21.5㎝、器高2.4㎝の皿Aで、口縁部は一旦屈曲して開く。口縁端部を丸くおさめており、体部の内面に放射状の暗文、見込みにらせん状暗文がある。124は口縁端部が丸い皿Aで、器表面が剥落しており、調整は不明である。125は口径31.7㎝、器高6.7㎝に復元された大型の鉢で、口縁部は体部からわずかに内湾して立つ。口縁端部を丸くおさめており、体部の内面には左上がりのハケの後、放射状の暗文を、見込みにもハケの後、2段のらせん状暗文を施している。口縁部の外端面から体部下半にかけて横方向の暗文を、底部にも左上がりのハケの後、横方向の暗文を施している。126は口径23.2㎝、器高8.7㎝の鉢で、口縁部は体部からわずかに内傾して立つ。口縁部に強いヨコナデを加えており、内外面が凹む。体部の調整は内外面ともにヨコナデで、外面には横方向のヘラミガキを施している。127も大型の鉢で、口縁部が体部から直立しており、一部に黒斑が見られる。口縁端部を内にわずかに肥厚させている。128は口径27.0㎝の羽釜で、口縁端部および鍔の端部は丸い。口縁部の内面は横方向のハケの後、ヨコナデ調整している。色調はにぶい黄橙色で、胎土中に多量の角閃石粒を含む。生駒西麓産の羽釜である。129は球形の体部から口縁部がわずかに開いて立つ把手付きの甕である。口縁端部を内に肥厚させており、体部の調整は外面が左上がりのハケ、内面はナデである。把手は合掌形を呈しており、体部に貼付けている。色調は橙色で、焼成は良い。胎土中に長石・石英・チャート粒を含む。130～132は甑あるいは鍋の把手とみられるもので、角状を呈する130の上面には切込みがあり、131は舌状を呈する。133・134は高杯の脚部で、後者の杯部の見込みには粗い放射状の暗文がある。135は外上方に開いた口縁部の端部を丸くおさめた

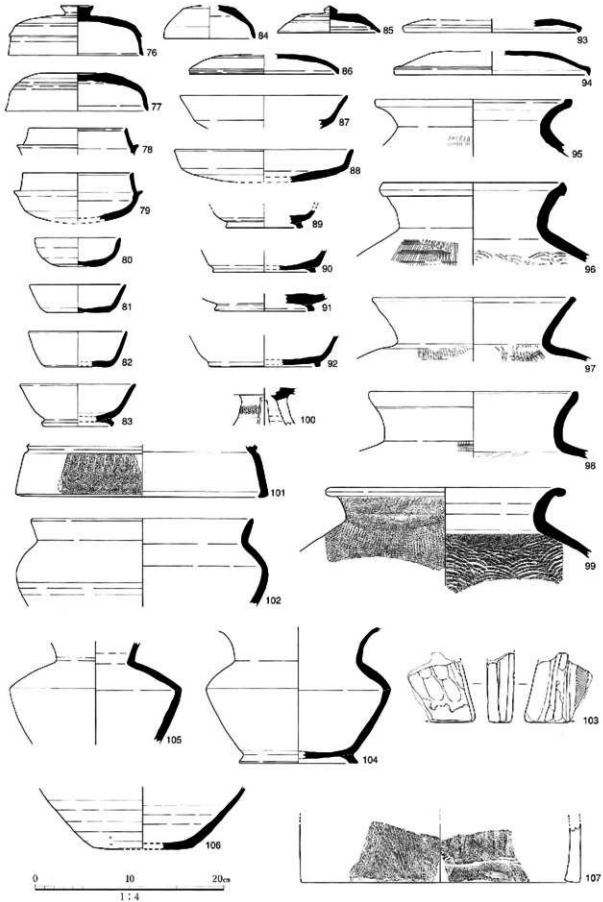


図16　SK201出土土器(1)

甕で、内外面の調整はヨコナデである。136・137は口縁部が外反する甕で、口縁端部を前者は上方に肥厚、後者は全体に丸くおさめている。ともに体部外面の調整は縦方向のハケで、内面の調整は前者はヨコハケの後、斜め方向のヘラケズリ、後者は縦方向のヘラケズリである。137の口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施しているが、内面にハケメが残る。138は口縁部が緩やかに大きく開いた甕で、口縁端部は丸い。体部の器面調整は外面が左上がりのハケ、内面は縦方向のヘラケズリで、頸部の内面にはヨコハケが残る。139は外反する口縁部の端部を面取る甕で、体部の調整は外面がタテハケ、内面は右上がりのハケの後、同一方向のヘラケズリである。頸部の内面にはヨコハケが見られる。140は最大径が体部の上半にある甕で、短く開く口縁部の端部を面取りぎみにおさめている。体部の調整は外面が左上がりのハケ、内面は縦方向のヘラケズリである。口縁部の内面には横方向のハケメが残る。141も口縁部が大きく開く甕で、体部の調整は外面が左上がりのハケ、内面は斜め方向のハケである。口縁端部は丸い。142は直立する体部の上端から口縁部が大きく開く甕で、体部の調整は外面が左上がりのハケ、内面は縦方向のヘラケズリである。口縁部の内外面に強いヨコナデ調整を加えており、端部を面取る。143は移動式竈の焚口の庇で、器体の内外面を粗いハケで調整している。色調は灰黄褐色で、胎土中に1～2㎜の角閃石粒を含む。生駒西麓産の移動式竈である。

以上の出土遺物のうち、須恵器76・100はTK208型式、77・101はTK10型式、78・96・98はTK47型式、79はTK23型式、84・95・99・125は難波Ⅲ中段階、83・85は難波Ⅲ新段階、89は難波Ⅳ古段階、90～92は難波Ⅳ新段階、81・82・86～88・93・94・102・104・105は難波Ⅴ古段階に、土師器は134～137・139・143は難波Ⅲ新段階、118・122は難波Ⅳ古段階、117・119は難波Ⅳ新段階、109～116・120・121・123・124・126～129・138・140～142は難波Ⅴ古段階に属するものと考えられる。（田中）

SK202は南調査区南東隅に位置する直径1.1m以上、深さ0.8mの不整形な土壙で、埋土は黒褐～にぶい黄褐色の粘土質シルトブロックである、SD202が重複している。遺物はない。

SK203はSK201と切合う不定形な土壙で、南調査区の西壁から土層観察用畔C－C'（図14）にかけて位置する。埋土は暗オリーブ褐色粘土混り中粒砂と灰茶褐色粗粒砂で、マサ化した黒雲母花崗岩と土器が出土した。（黒田）

144は弥生土器、145～153は須恵器で、154～160は土師器である（図19）。

144は甕の体部片と思われるもので、外面に5条一単位のヘラ描き沈線文がある。色調はにぶい黄橙色で、長石・石英・チャート・雲母粒を含む。弥生時代前期末葉に属するものであろう。

145・146は杯G蓋で、前者の天井部はヨコナデ調整しており、中央には低い宝珠つまみがつく。口縁部内面のかえりは短い。後者の器高は低く、口縁部のかえりも短い。ともに難波Ⅳ古～新段階に属するものであろう。148は底部の大半を欠損した杯身で、立上がりは受け部からほぼ直立している。TK23型式に属するものである。150は高杯の脚部で、裾は大きく開く。3方に台形を呈するスカシ孔を穿つ。裾端部は丸い。TK23型式に属するものであろう。147は口径11.0㎝、器高3.1㎝の杯Gで、底部はヘラ切り未調整である。調整は口縁部がヨコナデ、体部はヘラケズリ調整である。全体に焼き歪んでおり、口縁部の約1／2に黒色の自然釉が付着している。難波Ⅳ古段階に属する。149は器体の

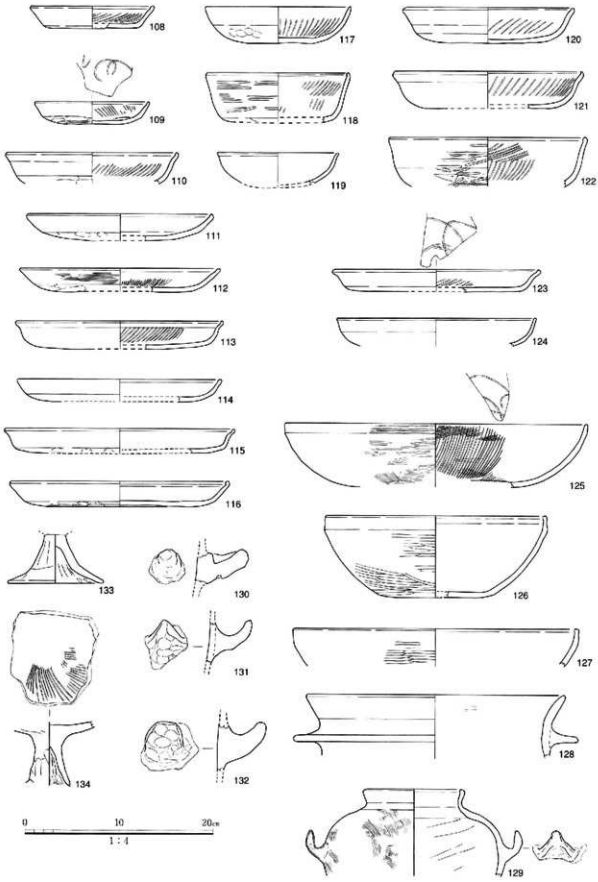


図17　SK201出土土器(2)

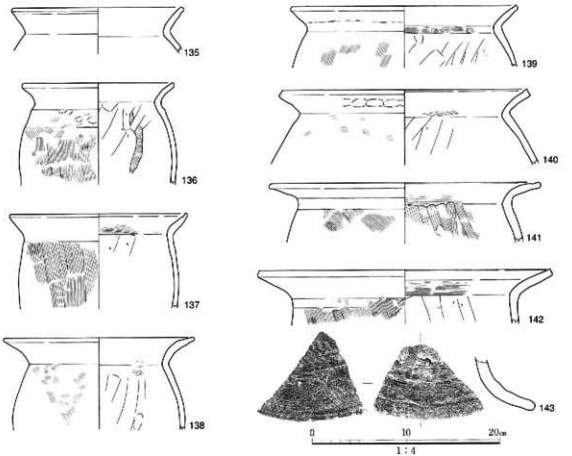


図18　SK201出土土器(3)

上半部を欠損した杯Bで、高台は外方に開く。底部の裏面をヘラケズリ調整している。難波Ⅳ古段階に属するものであろう。151・152は口縁部が外上方に開く甕で、端部は前者の上面が浅く凹み、後者は面取る。152の体部の外面は平行タタキで整形しており、内面には当て具痕が残る。153は口径44.2cmに復元された大型の甕で、口縁部は頸部から大きく開く。口縁部の外面に2条の浅くて太い凹線が巡る。難波Ⅳ段階に属するものであろう。154は口径9.2cm、器高2.5cmで、内面に放射状の暗文を施した杯Cである。底部外面にはユビオサエが残る。色調は橙色で、胎土中に微細な赤色粒・長石・石英・チャート粒を含む。難波Ⅳ古段階に属するものであろう。155は器体の下半部を欠損した高杯の杯部とみられるもので、内面には放射状の暗文がある。器体には内外面から穿った焼成後の孔がある。色調は灰白色で、胎土中に粗粒の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒を含む。難波Ⅳ新段階に属するものと思われる。156は底部の中央を欠損した杯Cで、口縁部は短く開く。器体の内面には放射状の暗文、見込みにもらせん状暗文を施す。器体の外面の調整は下半部が横方向のヘラケズリ、上半部はヨコナデの後、横方向のヘラミガキである。色調や胎土は154と変わらない。難波Ⅲ中～新段階に属するものであろう。157は底部を欠損した長胴甕で、口縁部は外反している。体部の調整は外面が縦方向の断続的なハケで、内面はタテハケの後、右上がりのヘラケズリである。158は口縁部が大きく開いた甕で、器体の調整は外面が左上がりのハケ、内面はハケの後、縦方向のナデである。色調や調整は157と変わらない。159・160は口径29cm前後で、口縁部が外上方に開く羽釜である。頸部

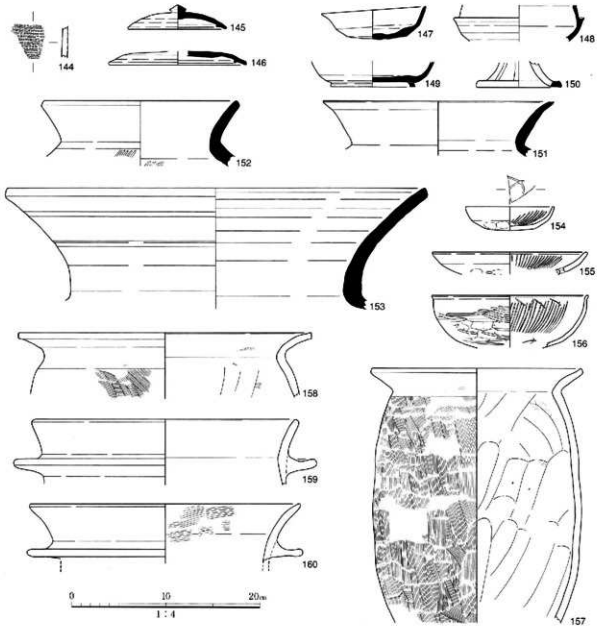


図19　SK203出土土器

にある鍔の端部は丸くおさめている。160の口縁部の内面には横方向のハケメが残る。色調は茶褐色で、胎土は角閃石粒を多量に含む生駒西麓産のものである。157～160は雛波Ⅳ古段階に属するものである。（田中）

SD202は南調査区東壁に沿って位置する長さ4.3m以上、幅1.7m以上の南北溝で、検出されたのは西肩だけで、東肩は調査区外である。しかし当地は傾斜地であることから、溝ではなく東下りの盛の可能性も残っている。埋土は黒褐～灰黄褐色の粘土～粘土混り粗粒砂である。（黒田）

本遺構で図化しえたのは須恵器161～167のみである（図20）。

161は口径13.4cmの杯蓋である。口縁部と天井部の境界の稜が突出しており、天井部の約2／3をヘラケズリ調整している。口縁端部は内傾して浅く凹む。162・163は杯身で、口径は162が14.4cm、163は13.6cmある。立上がりは後者より前者が長い。口縁端部は後者は細く、前者は丸く肥厚している。

前者は体部の2／3近くをヘラケズリ調整している。164は口径8.0cm、器高4.4cmの坩で、口縁部は体部からわずかに内傾して開く。体部は静止ヘラケズリの後、ナデである。165は直立する頸部から外上方に大きく開く壺の口頸部で、口縁端部を面取る。口縁部の下方に1条のにぶい凹線が巡る。器体の内外面に灰オリーブ色の自然釉が付着している。166は口径27.6cmの甕で、口縁部は頸部から緩やかに大きく開く。口縁部の下端に粘土紐を足して肥厚しており、端部は面取る。器体の内外面をヨコナデ調整している。167は口径58.6cmに復元された大型の甕である。口縁部は緩やかに開いており、端部を下方に肥厚している。口縁部の下方を1条および2条一単位の突帯2帯で区画して、その中に櫛描き波状文を施している。以上の須恵器のうち、161・164・165はTK23型式、166・167はTK47型式、162はMT15型式、163はMT85型式に属するものと思われる。

（田中）

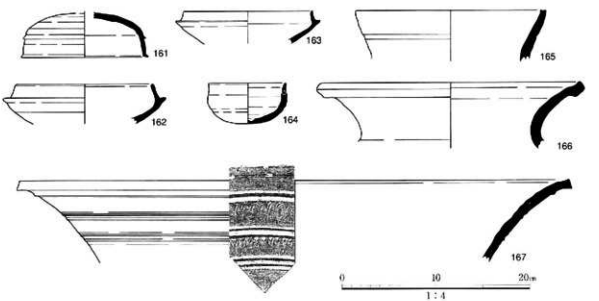


図20　SD202出土土器

SX201は北調査区に位置する南北長9.0m、深さ0.9mの土壙で、灰オリーブ～黄褐色のシルト～細粒砂のラミナをよくとどめた水成層で埋っている。遺物は出土しなかった。　（黒田）

石器類（図21、表2、図版19）

SD201およびSK105・203から弥生時代以前の所産であるサヌカイト製石器遺物が17点出土した。これらの石器遺物は、本来あるべき層準から遊離した資料である。ここでは石器6点について報告を行うが、内1点168は、表面の風化度が高いことや製作技術的な特徴から旧石器時代の所産と考えられる資料である。

台形石器168：素材剥片は左側縁部に礫面を残しており、打面部が厚く、縁辺部が鋭利な寸づまりの剥片である。右側縁部から表裏交互に横長剥片、あるいは調整剥片を剥離している。右側縁部の表面下半分には主要剥離面側からていねいな調整加工を連続的に施した後、主要剥離面側に急斜度の階

段状剥離が見られ、さらに微細な調整加工によって基部を作り出している。最終的な機能形態を台形石器とした調整加工は、この右側縁部の加工を重視したものである。一方、左側縁部は表裏交互に横長剥片を剥離した後の調整加工は顕著に認められない。基部には礫面が残されている。左右側縁部でそれぞれ剥離された横長剥片の剥離痕の大きさは、長さ2.0cm、幅0.6cm程であり、当初の使用状況が石核であったと考えた場合、極小型ナイフ形石器用の素材剥片剥離のため石核の可能性がある。機能部と考えられる鋭利な縁辺部には使用痕が顕著に認められる他、右上端部には表裏から細かな加工が認められる。今後、類例調査を行って引き続き検討を行いたい。

二次加工のある剥片169：側縁部に礫面を残す寸詰まりの剥片を素材とし、裏面左下端部には二次

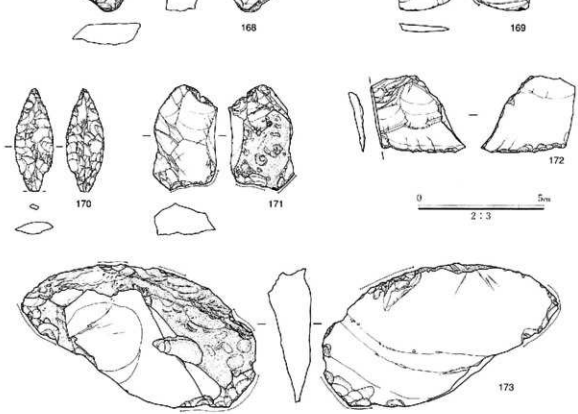


図21　石器類

表2　石器一覧表

番号	器種	素材の形状	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	出土位置
168	台形石器	打面部に礫面を残す横長剥片	3.3	3.7	0.9	9.9	SD201
169	二次加工のある剥片	両側面が割れた横長剥片	2.4	2.2	0.3	2.1	SD201
170	石鏃	形状不明	4.1	1.5	0.5	2.6	SD201
171	楔形石器	表面に礫面を残す寸詰まりの剥片	4.2	2.5	1.2	14.8	SK105
172	使用痕のある剥片小	側面が折れた横長剥片	3.1	3.7	0.7	5.9	SD201
173	使用痕のある剥片大	打面部に礫面を残す横長剥片	5.7	9.2	1.7	74.6	SK203

加工痕が認められる。上端部左側縁は上方から、右側縁部は裏面からの加圧によって折れている。

石鏃170：サヌカイト製の凸基式石鏃で、素材の形状は不明である。成形段階では、表裏両面の左右の側縁部には、おおむね下方から上方へかけて石器の主軸方向に押圧剥離が施されている。細部調整段階では、先端部をより細かな押圧剥離と細部調整加工によって先鋭化している。基部の末端については素材の剥離面が残されており、石器の主軸に対し下端部から1㎝ほどの位置を中心として押圧剥離と、細部調整加工によって茎部が作り出されている。石器の最大幅が中央にあり、形状は木葉形である。近畿地方の弥生時代中期段階の凸基Ⅱ式石鏃[平井勝1991]や後期段階の有茎式石鏃とは形態的特徴が異なっている。今後、中部瀬戸内地方の弥生時代後期段階の凸基Ⅱ式石鏃との比較や、近畿地方での類例調査を行いたい。

楔形石器171：表面に原礫面を残すサヌカイト製の楔形石器である。厚さ1.5㎝程の板状剥片ないし、小型の分割礫を素材とし、上下端部をそれぞれ打撃部と機能部にすることから、加工痕や使用痕がそれぞれの位置に認められる。一般的に同じ素材に対する打撃部はあまり変化しないが、これは打撃方向が2度変化している。機能部に対して打撃が垂直方向に行われた1度目の作業と、約25度作業面を転移して2度目の打撃が行われていることが観察される。所属時期は不明である。

使用痕のある剥片172：サヌカイト製の横長剥片の先鋭な端部縁辺に不規則な使用痕が認められる。素材となった横長剥片は、打面部、両側縁部が折れており全体の形状は不明である。表面には数枚の平坦な剥離面によって構成され、折れた打面部には階段状の剥離痕が観察される。弥生時代前期以降に出現する大型の石槍状石器の調整剥片の可能性がある。

二次加工のある剥片173：表面に原礫面を残すサヌカイト製の大形の横長剥片で、表面と主要剥離面の縁辺部に二次加工が認められる。表面の大きな剥離面は、貫入した原礫面と石理によって自然剥離した面である。また、表面に残された原礫面には、打撃前の試し打ちの痕跡が石理に沿うように残されており興味深い。剥片素材の石核用に用意された剥片か、弥生時代前期以降に出現する大型の石槍状石器の素材剥片の可能性がある。（平井）

瓦塼類（図22、図版16）

178が丸瓦、182が塼であるほかは、凹面に布目痕がある瓦である。出土遺構は174～176がSD201、180～182がSK201、177・183がSK101、179がSK106、178が第1層である。

平瓦から見ていくと、174は厚さ3.3㎝と分厚く、2枚の粘土板を貼り合せて作っている。凸面にタタキ痕が見られ、胎土は粘土っぽいが、長石・石英・チャートを多く含み粗雑である。焼成は良好で、須恵質を呈する。175は磨滅が激しく調整は不明で、胎土は精緻だが焼成は甘い。176は凸面が磨滅しており調整は不明である。胎土はチャート・灰色クサリ礫を含むが精緻で、焼成は甘く土師質を呈する。177は胎土に直径4㎜の長石・石英粒を含みやや粗雑だが、焼成良好な土師質である。179は胎土は精緻で、焼成良好な土師質である。180は桶巻き作りで、桟骨の幅は約2.5㎝を測り、広端部（桶口縁部）から3.0㎝上から始まる分割界線突起痕が右側縁に見え、布袋は桶口縁部から5.0～6.5㎝上までしか被せられていない。側面は多面形に面取りされ、凸面にヨコナデが見られる。胎土は長石・石

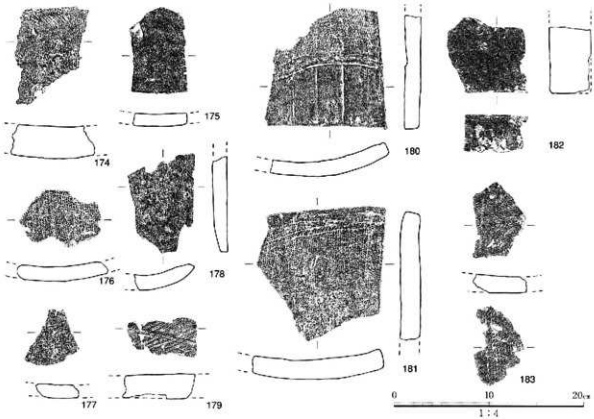


図22　瓦塼類

英・灰色クサリ礫を含むが精緻で、焼成はやや甘い土師質である。181の凸面は磨滅しており調整は不明で、胎土は精緻だが焼成は甘い。183は凸面に縄目タタキ痕が見られ、胎土は直径1～4㎜の灰色クサリ礫を含み粗雑だが、焼成は良好で須恵質を呈する。

178は側部凹面と端部凹面に幅広い面取りをもつ丸瓦で、胎土は直径4㎜のチャートを含みやや砂っぽく、焼成は甘い。182は厚さ4.5㎝の直方体の塼で、直径9㎜のチャートを含むなど胎土は粗雑だが、焼成は良好である。（黒田）

3）近世の遺構と遺物（図23～29、図版1・4・5・18）

近世遺構として溝もしくは自然流路のSD101～108と、土取り跡と推定される土壙SK101～106が見つかった。

SD101～108はいずれも水成層で埋積している。SD101・108が西から東に流れ、南へ方向を転じる以外は、東流する東西溝で、幅0.3～1.7mの規模である。SD104～106埋没後、SD107・108が掘られる。SD105からは184～192・196が、SD107からは193・194が、SD108からは195が出土した（図23）。

184～188・192・193・195は伊万里焼、189・190は関西陶器、194は瀬戸焼、196は堺擂鉢である。184は青磁染付碗で口縁部内面に四方樗文、見込みにコンニャク印判の五弁花が見られる。185・193は小杯、186はコンニャク印判の丸に葉文の碗、187は底部蛇ノ目釉ハギの青磁火入れ、188は底部蛇ノ目釉ハギの皿、192は碗蓋、195は色絵の蓋である。189は内外面に鉄釉を施した土瓶、190は

土瓶の蓋で外面に鉄釉で太い圏線を描き梅鉢文を配する。191は玉をくわえたキツネの土人形、194は内外面に灰釉を施した鉢、196は口縁端部外面に2条、内面に1条の沈線を巡らせ、スリ目の櫛原体は10本で体部外面のケズリは時計回りである。

SD105は18世紀後半、SD107・108は19世紀前半と考えられる。

SD108は箱状の木組みを経て南へ流れを変える。木組みの部材はいずれもスギ(Cryptomeria japonica)材で、197・198は雑に地面に敷かれ、床面をすべて覆っていたわけではないので、転用材と考えられる。199～203は東・南・北を囲むように地面に立てられていた。199は棒状の部材で202・203の空隙を埋めるため押込まれたのであろう。

図25のように197は長さ94cm、幅24cm、厚さ4cmの短冊形で、1隅に方形の切欠きを入れている。198は長さ97cm、幅20cm、厚さ4cmの短冊形短辺の1方を斜めに切落し、台形とし、最長辺の両端を方形に切欠く。199は長さ76cmの棒である。200はやや腐朽の進んだ短冊形板材で、長さ124cm、幅20cm、厚さ4cmの1長辺の両端を方形に切欠いている。201は長さ88cm、幅16cm、厚さ3cmの両短辺を方形に切欠く。202は幅32cmとやや幅広の部材で、1短辺に出枘を1つもつ。203は腐朽の進んだ短冊形で、1短辺に出枘と方形切欠きをもつ。

SK101～103は北調査区(図28)、SK104～106は南調査区(図29)で見つかった。

SK101は南北長8.4m、深さ0.3～0.7mの南・北辺が直線的な土壙で、底面に水の流入を防ぐ畔状の高まりが残ることから、土取り跡と考えられる。

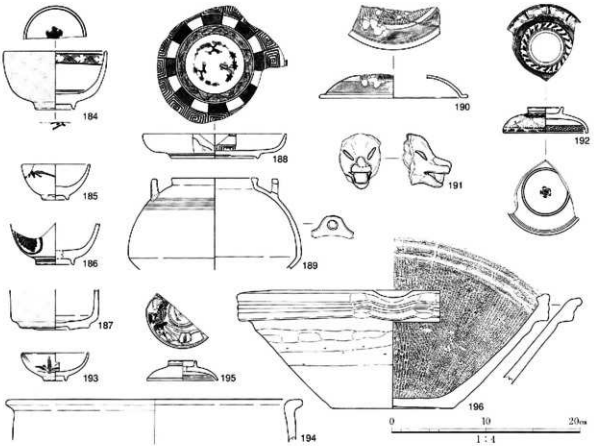


図23　SD105・107・108出土遺物

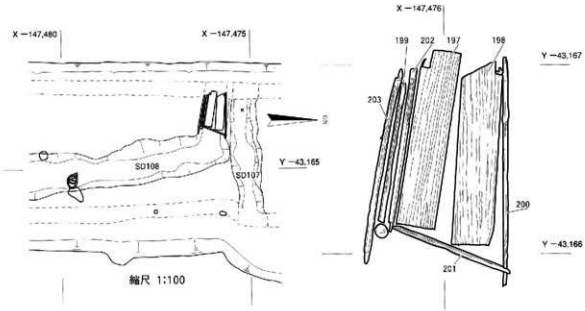


図24　SD107・108平面図

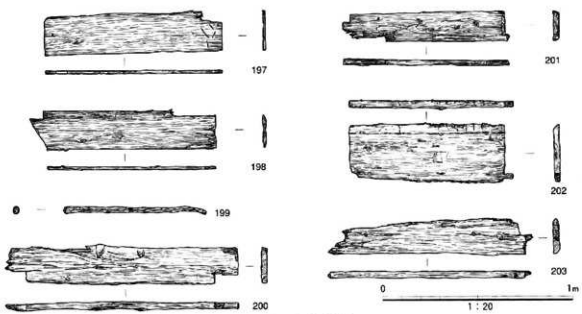


図25　SD108出土部材

SK102は南北長9.4m、深さ0.2～0.7mの土壙で、SK103と同時に暗灰黄～黄褐色の粘土偽礫で埋められている。図26の205・207が出土した。

205は華南三彩の盤で口縁部は外方に折り曲げられ、口縁端部は切欠きにより輪花風に仕上げられ、端部内面に細い沈線による縁取りがある。207は土師質の匣鉢で、裏面に糸切り痕、見込みに直径約5㎝の溶着痕がある。

SK105が古く、埋没後SK104・106が掘られる。SK105は南北長11.0m、深さ2.4mで中央に高さ0.9mの畔状高まりが残っている。図26の204・206・208が出土した。204は伊万里焼皿、206は粘板岩製の硯で、表裏両面に使用痕があり、208は焼成が上師質の堺擂鉢でスリ目の櫛原体は11本以上

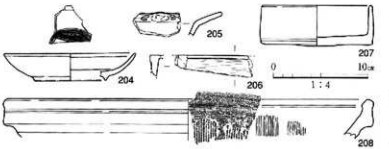


図26　SK102・105出土遺物

である。18世紀代の上取り跡と見られる。　（黒田）

SK105も須恵器210～214、土師器215・216、弥生土器209など、各時期の遺物が出土しているが、図化できた資料は少ない(図27)。

209は口径26.0㎝の弥生土器で、口縁部は体部から外上方に短く開く。端部は丸く、口縁部の内外面をヨコナデ調整しており、体部の調整は内外面ともにナデである。器体の外面に煤が付着している。色調は橙色で、胎土中に1～2㎜の長石・石英粒を多量に含む。弥生時代中期前葉のものである。

210は体部の過半を欠損した杯身で、立上がりは内傾している。口縁端部は内側に凹面をなす。211は口径17.0㎝、口縁部が外上方に開く無蓋高杯で、口縁部と体部の境界には2条の突帯があり、これの下に櫛描き波状文が巡る。口縁端部はわずかに内傾している。212は口縁部が頸部の上端近くで内湾して開く甕で、口縁端部を上下に肥厚する。口縁部の外端面は幅広い凹線状を呈する。213は口縁部が緩やかに開く甕で、丸い端部の下方に断面三角形の突帯を1条付加している。器体の調整は内外面ともにヨコナデである。214は緩やかに開いた口縁部の上端近くがわずかに反る甕で、口縁端部を面取る。口縁部の下方に断面三角形の突帯を1条付加しており、これの下に2条の櫛描き波状文を施している。215は内湾して開く口縁部が上方で短く外反する甕で、端部を丸くおさめている。体部の調整は外面がヨコナデ、内面は強いナデである。216は口径9.8㎝、器高12.7㎝で、最大径が体部の中程にある甕である。口縁部は球形の体部から直立ぎみに開いており、端部を面取る。体部の調整は外面が左上がりのハケ、内面は下半がユビオサエで、これより上は左上がりのナデである。口頸部の調整はヨコナデであるが、頸部の内面にはユビオサエが残る。色調は橙色で、胎土中に1～2㎜の石英・

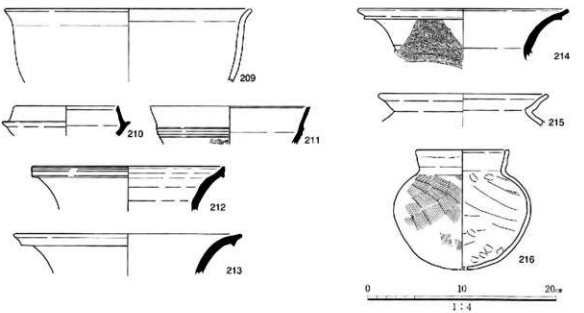


図27　SK105出土土器

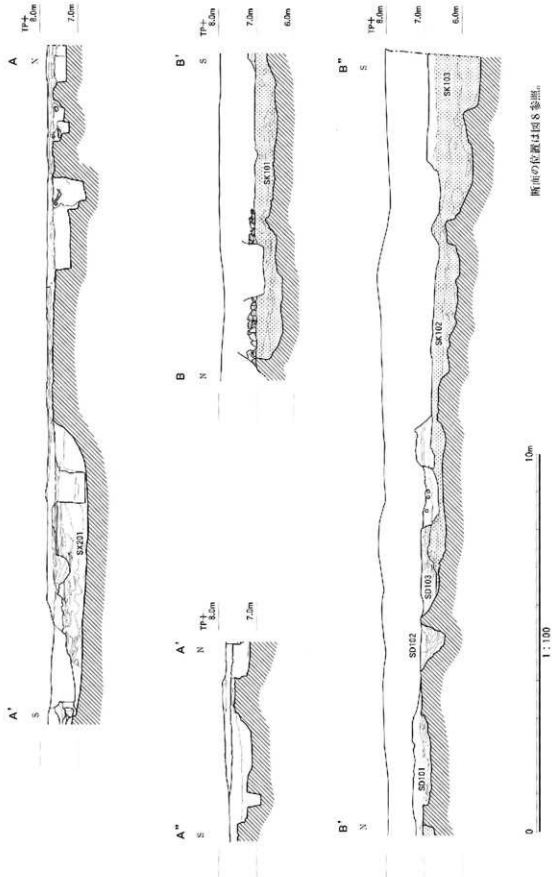


図28　北調査区遺構断面図

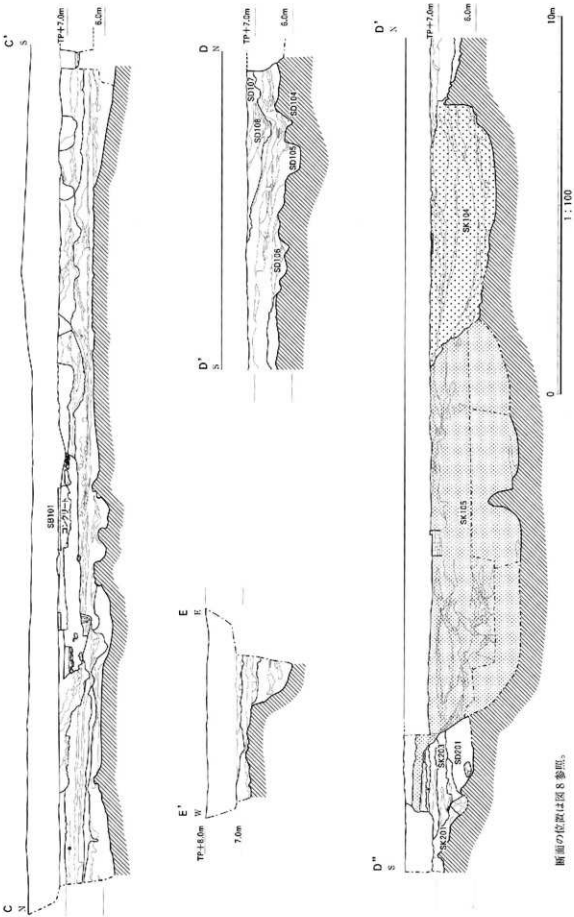


図29　南調査区遺構断面図

長石粒を含む。

以上の遺物のうち、須恵器210～212はTK23型式、213はON46段階、214はTK208型式に属するものであろう。土師器215・216もTK23型式の須恵器に共伴するものとみておきたい。なお、215は器形や製作技法などが、いわゆる宇多形甕と呼ばれているものに類似しており、注意すべきものである。以上の遺物の内、18世紀代のもの以外は混入品である。　　(田中)

4)近代の遺構と遺物(図30・31、図版5)

南調査区でレンガを床に敷いた建物SB101が検出された。

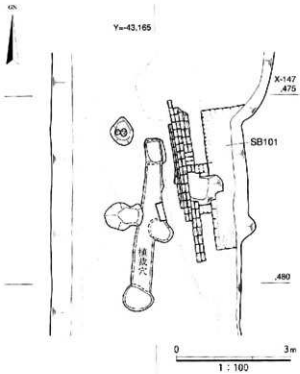


図30　SB101平面図

SB101は南北3.7m、東西1.5m以上の範囲にレンガを敷き詰め、上面に漆喰を塗って床としている。その西側に溝幅0.2m、深さ0.1mのやはりレンガで作られた雨落ち溝があり、床の西端から溝芯までは0.7mあり、これが軒の出の可能性がある。建物基礎は掘込み地業によって造られ、南北11.3m、深さ0.3～0.7mの土壙を掘り、その中央6.0mに栗石を厚さ0.5mを詰め、上にコンクリートを流し、レンガを敷き詰める。当地は明治22(1889)年、創設される騎兵第4大隊が、昭和7(1932)年第4連隊として堺市長曽根町に移るまで、兵営が置かれた地であるから、兵営関係の建物と思われる。

近代の遺物として217～220が第0層から出土した。戦前の美濃焼と思われる。217・218・220は染付碗で、219は白磁皿である。

217は縁と青2色の圏線を碗の両面に巡らせ、透明釉をかける。218は花文を描いた銅版絵付である。219は貫入が顕著な白化粧に透明釉をかける。220は体部が真直ぐラッパ状に開く青磁染付碗で、口縁部内面に雷文を、見込みに龍文のような文様を描くが滲んでいる。底部に字款があり、全体に透明釉をかけている。　　(黒田)

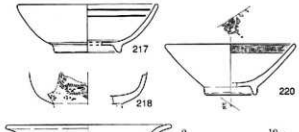


図31　近代の陶磁器

第Ⅲ章　遺構と遺物の検討

第１節　遺物から見た宰相山遺跡の原始・古代

宰相山遺跡は東側に、縄文時代を通じて河内湾から河内潟へ、さらに河内湖へと変遷する水域を臨む上町台地の東斜面からその裾野にかけて位置し、縄文時代早期から近世・近代に至る遺構・遺物が濃密に分布する。特に飛鳥～奈良時代には難波京域に取入れられたことも考えられ、平成14年度出土の飛鳥時代の完形木製鋤[積山洋2003]は注目されている。

今回南北90mにわたり、地山がTP+6m前後で検出される傾斜地高所部を発掘した結果、調査地南端で溝や土壙の埋土から弥生時代から奈良時代に至る多量の遺物を得ることができたので、その意義を考察し、まとめにかえたい。

注目されるものの一つに、SD201から出土した台形石器168がある。これは遊離資料だが、表面の風化度が高いことや製作技術的な特徴から、旧石器時代の遺物の可能性がある。上町台地北部ではこれまで同時代の遺物は確認されていないため重要である。

弥生時代の各時期の土器と石器も出土した。前期末葉のものとして壺3・6・144、壺4・5があり、中期のものとしては前葉の壺8、壺209、中葉の壺7、後葉の生駒西麓産の壺9・10と高杯か鉢になる11・12がある。後期の土器はここでは見つからなかったが、平成７年度の調査で出土している。末期の庄内式系土器としては生駒西麓産の甕60がある。

古墳時代前期の古式土師器として、布留式系の甕52・59・62がある。続く中期の土師器は多く出土しており、中には東海系のいわゆる宇多形甕に類似した215もある。須恵器に至っては古墳時代中期～後期のすべての型式が出土している。

飛鳥～奈良時代の遺物として難波Ⅲ新段階～Ⅴ段階の土器類が連綿と出土している。

朝鮮半島との交流を示す遺物として、韓式系土器13～17と百済系陶質土器と酷似する106がある。13は格子タタキをもつ瓦質土器、14・15・17は格子タタキをもつ平底鉢か甕の軟質土器、16は縄席文タタキの陶質土器壺で、５世紀に属する。

古墳時代の古墳に伴ったと考えられる遺物として、長さ１m前後の六甲山系の桃色カリ長石を含有する黒雲母花崗岩のほか、窯窯焼成の円筒埴輪18・107と、滑石製の臼玉68・69、須恵器の高杯形器台50がある。50はTK216形式～ON46段階で、当地周辺の上町台地上に中期古墳が存在した可能性を示す。

また、生業に関係するものとして、製塩土器19・20、定置網に使われたと考えられる土錘71・72、椀形鉄滓73・74がある。製塩土器は５世紀後葉のものだろうが、他は飛鳥時代と考えられる。

祭祀にかかわるものとしてSD201から出土した舟形木製品75があり、半分に割れ、一方に燃えた痕跡がある。現存長75.0cmと大型で、平城宮東院の園池SG5800Bから出土した5816[奈良国立文化財研究所1985]に匹敵する。5816も大型で、全長55.8cm、幅11.3cm、厚さ5.5cmを測り、8世紀後葉～9世紀前半に比定され、実際に水に浮かべて使われたと推定されている。このことは舟形木製品75を理解するに当って参考になる。当地は昭和13(1938)年、奈良時代の刳舟が出土したことから、一躍有名になった(この木製品を木棺の一部とする推定も一部にはあるが)。この刳舟は長さ2m以上、幅1m、厚さ5cm程度であったという[戸田秀典2004]。水の祭祀と関わると思われる舟形木製品の出土は、この推定刳舟を見直す作業の必要性を示すと同時に、「長柄船瀬」ひいては難波津を、上町台地東方の河内湖に比定した梶山彦太郎・市原実両氏の説[梶山・市原1986]に利すると考えられる。

弥生時代に上町台地上やその周辺にも多くの集落が営まれ、前期には森の宮遺跡・桑津遺跡・山之内遺跡・遠里小野遺跡・瓜破遺跡・長原遺跡、中期には前記のもの以外に、大坂城跡下層・大坂城下町跡・崇禅寺遺跡・同心町遺跡・森小路遺跡が挙げられ、その数を増やすが、後期になるとこれらの遺跡は出土土器量を減らす。今回の調査地で後期の土器を見なかったのは、これらと同じ傾向に属する可能性はある。一方、後期になって長原遺跡・崇禅寺遺跡・大坂城下町跡は規模を拡大させる。

難波宮跡下層からは5世紀後半の大規模な倉庫が16棟以上見つかり、大和朝廷の難波進出は動かせないが、地元の豪族の存続は当然予想されるから、それら豪族の奥津城の存在は難波地域に想定しなければならない。今回検出の古墳に伴ったと予想される遺物は、その想定を裏付けるものである。また韓式系土器や陶質土器が出土することも、古墳時代中期における当地の性格を示すものであろう。

飛鳥～奈良時代の遺構として、平成7年度検出の礎石建物1棟と掘立柱建物1棟があり、両者は谷をはさんで北と南の高台に立地した。礎石建物は7世紀末に位置付けられ、総柱建物だが桁行・梁行とも3間と小規模なことから、調査担当者は寺院などに伴うものではなく、倉庫のようなものと考えた。今回、桶巻き作り平瓦と考えられる180・181が出土したことから、付近に飛鳥時代の寺院が存在した可能性も出てきた。四天王寺以外にも、南約1kmの細工谷遺跡に「百済尼寺」があることから、難波地域においても大和飛鳥京と同様に、仏教寺院が多数存在したと予想されるのである。　(黒田)

第2節　近代の景観

近代の遺構として南調査区からレンガ建物SB101が見つかったので、その性格を考えておきたい。

1871(明治4)年8月、兵部省官制改正により大阪鎮台ができるが、1888(明治21)年、大阪鎮台は第4師団と改称され、翌年騎兵第4大隊第1中隊が創設され、当地にその兵営が置かれる。以後、1932(昭和7)年に騎兵第4連隊(以下、連隊と略する)として堺市長曽根町へ移設されるまで、この地を占めた。その後、大阪市に移管され、真田山公園として1939(昭和14)年に完成する。当時は現在の真田山スポーツセンターの北側を東西に横切る道路、すなわち餌差町と玉造元町を結ぶ道路はなかったから、連隊と真田山陸軍墓地(現、大阪靖国霊場。以下、陸軍墓地と略する)とは境を接しており、陸軍墓地の南の丘陵端は連隊の調練場の中へ入込んでいた。

陸軍墓地の丘陵は、江戸時代初期に玉造平野口町年寄高津屋吉津屋吉右衛門に肝煎させた畑地で、江戸時代を通じて「吉右衛門肝煎地」と呼ばれたが、1869(明治2)年、大阪府の所管に移り、1871年4月、陸軍埋葬地にされた[横山篤夫2001]。

さて図32の1872(明治5)年・1902(明治35)・1918(大正7)年の古地図を基に、この地の変遷を追いたい。

1872年には陸軍墓地の地(心眼寺・興徳寺の東側)に「招魂社」の文字が見え、連隊の地には何も描かれていない。

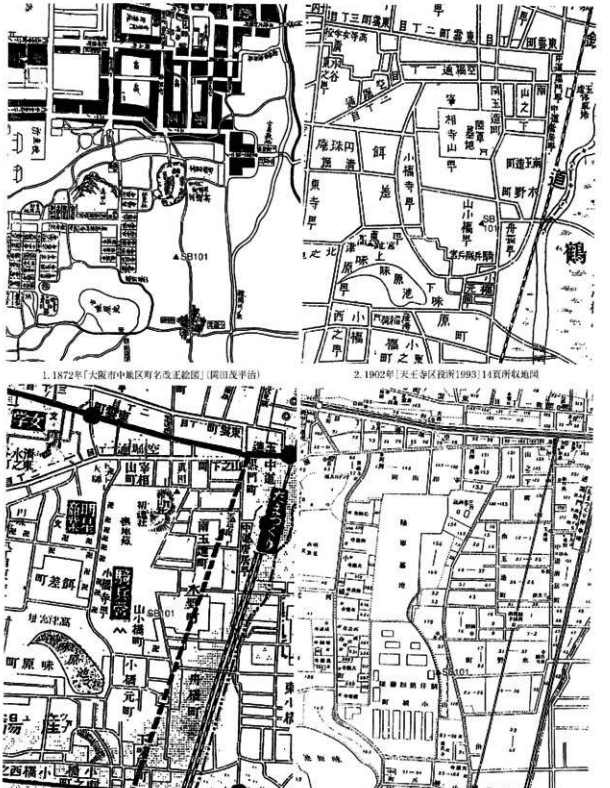
1902年の地図には、当然1889(明治22)年創設の連隊兵営の記述はある。すなわち「宰相寺山町」には「陸軍墓地」と記され、「山小橋町」には「騎兵隊兵営」とある。

1918年の左の地図には、陸軍墓地の地に「招魂社」と「無地蔵」が、連隊の地は「小橋寺町」と「山小橋町」に挟まれて「騎兵営」の文字が、同年の右図には連隊の地に「騎兵第四連隊」「山小橋町」の文字と大小15棟の建物が描かれている。

連隊の地勢は兵営のある丘上が一番高く、東北方に向って段丘状に低くなるテラスに、調練場が3個所配されていたという[戸田秀典2004]。SB101が見つかった地は丘陵の最高所ではないが、宰相山遺跡の当初発見地よりは高位である。

1918年の右図でSB101の地を検討すると、右図では実際の地勢を無視して連隊の地を平坦地のように描いているが、この意図的改変を考慮して、SB101の検出地を真西へ平行移動すると、慶伝寺と大円寺の敷地境がくることから、右図で最も東端に位置する正方形に近い、寸詰まりの建物の可能性が高いことがわかる。

SB101は連隊の兵営の一つであろうが、発掘成果からはその性格は未詳である。将来の連隊関係の図面資料の発見に期待したい。　(黒田)



1. 1872年「大阪市中央区町名改正絵図」(岡田茂平治)

2. 1902年「天王寺区役所1993」14頁所収地図

3. 1918年「天王寺区役所1993」20頁所収地図

4. 1918年「書地入最新　大阪市街地図」(箕島正夫)

図32　調査地周辺の近代変遷過程

引 用 ・ 参 考 文 献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001、『大阪市文化財地図』

大阪市文化財協会1983、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ

1992、『難波宮址の研究』第九

1996、『森の宮遺跡』Ⅱ

1998、『山之内遺跡発掘調査報告』

1999、『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅰ

2001、『森小路遺跡発掘調査報告』Ⅰ

2002、『大坂城跡』Ⅴ

2004、『宰相山遺跡発掘調査報告』Ⅰ

大阪府教育委員会1981、『淡輪遺跡発掘調査概要報告書』Ⅲ

1987、『淡輪遺跡発掘調査概要報告書』Ⅶ

梶山彦太郎・市原実1986、『大阪平野のおいたち』 青木書店

黒田慶一1998、「信開ホテルによる建設工事に伴う発掘調査(DC96-1)」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成8年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.13－22

古代の土器研究会1992、『都城の土器集成』Ⅰ

小山正忠・竹原秀雄1967、『新版 標準土色帖』 日本色研事業株式会社

佐藤隆1994、「森の宮遺跡の土馬と人面土器」：大阪市文化財協会編『葦火』48号、pp.6－7

2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.253－268

新修大阪市史編纂委員会1988、『新修大阪市史』第1巻

鈴木秀典1992、「住友銅吹所の発掘－その3－銅吹所の下から飛鳥時代の祭祀用木製品発見」：大阪市文化財協会編『葦火』38号、pp.2－3

積山洋1998、「飛鳥時代の難波京の一角－天王寺区宰相山遺跡の発掘調査から－」：大阪市文化財協会編『葦火』76号、pp.4－5

2003、「飛鳥時代土木工事の証人－宰相山遺跡出土の木製鋤－」：大阪市文化財協会編『葦火』103号、pp.6－7

高井健司・松本百合子1991、「(株)長谷工都市開発による建設工事に伴う御勝山古墳発掘調査(OK90-2)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成2年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.77－93

田辺昭三1981、『須恵器大成』 角川書店

趙哲済1991、「長原の氷期の鈴人」：大阪市文化財協会編『葦火』32号、pp.4－5

天王寺区役所1993、『わがまち天王寺－地図や写真でみるいまむかし－』

戸田秀典1963、「古代の難波」：古代学協会編『古代学』第11巻第２号　（『奈良・平安時代の宮都と文化』、吉川弘文館、1988年に再録）

戸田秀典2004、「宰相山遺跡第一次発掘調査について」：大阪市文化財協会編『宰相山遺跡発掘調査報告』、pp.59－63

難波宮址顕彰会1978、『森の宮遺跡第３・４次発掘調査報告書』

奈良国立文化財研究所1985、『木器集成図録　近畿古代編』　奈良国立文化財研究所史料第27冊

東大阪市文化財協会1994、『西ノ辻遺跡第27次・鬼虎川遺跡第32次発掘調査報告書』

平井勝1991、『弥生時代の石器』考古学ライブラリー64、ニュー・サイエンス社

平田洋司1995、「弥生時代の森の宮遺跡」：大阪市文化財協会編『葦火』54号、pp.２－３

平林悦治1938、「大阪市内発掘刳舟伴出の木製盤」：考古学会編『考古学雑誌』第28巻第11号、pp.27－30

松尾信裕・横山洋1996、「河内湾の岸辺から－天王寺区宰相山遺跡出土の縄文土器－」：大阪市文化財協会編『葦火』63号、pp.４－５

松本百合子1991、「はじめまして勝山遺跡です」：大阪市文化財協会編『葦火』31号、pp.６－７

森の宮遺跡発掘調査団1972、『森の宮遺跡第１・２次調査報告』

横山篤夫2001、「真田山陸軍墓地の沿革－特に戦後の引継ぎ問題を中心に－」：真田山陸軍墓地とその保存を考える会（2001年10月28日例会レジュメ）

あ と が き

宰相山遺跡は昭和13(1938)年春、大阪市営真田山公園のダイビング・プール建設中に発見された。残念ながらその時出土した遺物のほとんどは、戦災によって失われてしまった。また、このプールは、幻となった昭和15年東京オリンピックの選手強化を目的として造られたと言うから、遺跡の発見自体も昭和秘史めいて聞える。

続く発掘調査は平成7(1995)年、市営プールの建替に先立って当協会が行い、縄文時代早期の土器から、近世に至る遺構・遺物が出土した。実に57年ぶりの本格的調査であった。今回の調査地はその南方数十mに位置し、弥生時代から奈良時代の当地の連綿と続く繁栄を窺うことのできる多岐にわたる遺物が見つかった。河内湖に面した交通の要衝ゆえであろうか。難波京に取込まれていく前提条件を見る思いがする。

末筆ではあるが、本書をなすに当って関係各位には並々ならぬ御協力を賜った。改めて謝意を表すとともに、今後とも当協会の事業への変わらぬご理解とご支援をお願い申し上げる次第である。

(藤田幸夫)

索　引

〈遺構・遺物に関する用語〉

M　MT15型式 …… 24
　MT85型式 …… 24
O　ON46段階 …… 11,33,35
T　TK10型式 …… 20
　TK23型式 …… 11,20,24,33
　TK47型式 …… 11,20,24
　TK208型式 …… 11,20,33
　TK216型式 …… 11,35
あ　アカホヤ火山灰 …… 4
　窯窯 …… 10,35
　栗津SZ式 …… 1
い　生駒西麓産 …… 10,14,18,20,23,35
　移動式竈 …… 17,20
　伊万里焼 …… 7,27,29
う　臼玉 …… 2,14,35
　宇多形墨 …… 33,35
お　桶巻き作り …… 26,36
　押型文土器(高山寺式)・1, 4
か　瓦質土器 …… 10,35
　華南三彩 …… 29
　関西陶器 …… 27
　韓式系土器 …… 8,10,35,36
き　金環 …… 2
く　百済系 …… 17,35
　朝舟 …… 36
こ　合子 …… 2
さ　塼(擂鉢) …… 27,29
　サヌカイト …… 24,26
　匣鉢 …… 29
し　庄内式(系) …… 2,14,35
す　スギ …… 15,28
せ　製塩土器 …… 8,10,35
　青磁染付 …… 27,33
　石核 …… 25,26
　石鏃 …… 26
　セタシジミ …… 2
　瀬戸焼 …… 27
　塼 …… 26
た　台形石器 …… 24,25,35
と　陶質土器 …… 10,17,35,36
　銅版絵付 …… 33
　土錘 …… 8,14,35
　凸基式 …… 26
　凸基Ⅱ式 …… 26
　突帯文土器 …… 4
　土馬 …… 4
な　長原式土器 …… 2
　難波Ⅲ …… 14,15,20,22,35
　難波Ⅳ …… 8,20,22,23,35
　難波Ⅴ …… 11,14,20,35
　軟質土器 …… 10,35
ね　粘板岩 …… 29
は　白磁 …… 33
　埴輪 …… 2,8,10,17,35
ふ　舟形木製品 …… 8,15,36
　船元式土器 …… 1
　船元Ⅱ式(土器) …… 1,4
　布留式(期・系) …… 2,11,35
へ　平安神宮火山灰層 …… 1
み　美濃焼 …… 33
　三輪玉 …… 2
も　木製勾 …… 4,35
や　弥生土器 …… 2,4,8,20,30
ゆ　有茎式 …… 26
わ　椀形(鉄)滓 …… 8,14,35

〈地名・遺跡名など〉

い　石山御坊 …… 3
う　上町台地 …… 1, 2, 4, 35, 36
　瓜生堂遺跡 …… 2
　瓜破遺跡 …… 1, 2, 36
　瓜破北遺跡 …… 2
　瓜破台地 …… 1
お　大坂城下町跡 …… 2, 36
　大坂城跡（下層）…… 2, 36
　大坂本願寺 …… 3
　御勝山古墳 …… 2
　遠里小野遺跡 …… 2, 36
　恩智遺跡 …… 1
か　勝山遺跡 …… 1
　加美遺跡 …… 2
　亀井遺跡 …… 2
　河内平野 …… 2
き　鬼虎川遺跡 …… 1, 2
　騎兵第4連隊 …… 33, 37
　喜連東遺跡 …… 2
く　百済尼寺 …… 3, 36
　桑津遺跡 …… 2, 36
け　慶伝寺 …… 37
こ　興徳寺 …… 37
　神並遺跡 …… 1
さ　細工谷遺跡 …… 3, 36
　讃良川遺跡 …… 1
し　四天王寺 …… 3, 36
　心眼寺 …… 37
　神宮寺遺跡 …… 1
せ　瀬川遺跡 …… 1
そ　崇禅寺遺跡 …… 2, 36
た　大円寺 …… 37
て　帝塚山古墳 …… 2
と　同心町遺跡 …… 2, 36
な　長原遺跡 …… 1, 2, 36
　難波長柄豊碕宮 …… 3
　難波宮跡（下層）…… 1, 2, 36
　縄手遺跡 …… 1
の　野畑遺跡 …… 1
は　柱本遺跡 …… 1
　馬場川遺跡 …… 1
ほ　穂谷遺跡 …… 1
も　森小路遺跡 …… 2, 36
　森の宮遺跡 …… 1, 2, 4, 36
や　八尾南遺跡 …… 1
　山之内遺跡 …… 1, 2, 36
り　陸軍墓地 …… 37

Archaeological Report
of
Saisho-yama site in Osaka, Japan

Volume II

A Report of Excavation
Prior to the Development of
Sanada-yama Park
in 2003

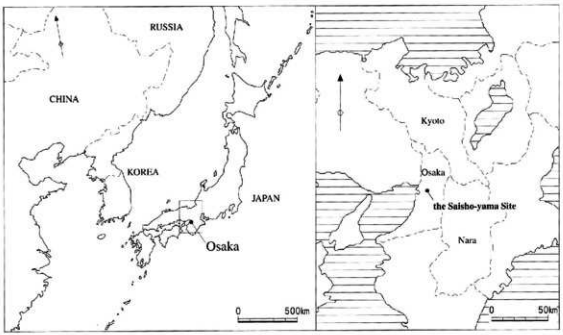
March 2004

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SB : Building
SD : Ditch
SK : Pit
SX : Other feartures



CONTENTS

Foreword
Explanatory notes
Acknowledgement

Chapter I Outline of investigations at the Saisho-yama Site 1
S.1 Site Location and Historical Setting 1
S.2 Former investigation results in the Saisho-yama Site 4

Chapter II Investigation results 5
S.1 Background and progress of research 5
S.2 Stratigraphy / Features and remains 7
1) Stratigraphy and remains of the Strata 7
2) Features and remains of the Ancient period 11
3) Features and remains of the Early Modern period 33
4) Features and remains of the Modern period 38

Chapter III Discussion of features and remains 39
S.1 Remains of the Ancient period in the Saisho-yama Site 39
S.2 Setting and Changes in the Saisho-yama Site in the Modern period 42

References 45

Postscript and Index
English Contents and Summary
Extract

ENGLISH SUMMARY

The Saisho-yama site is located at the eastern slope of the Uemachi Plateau stretching from north to south in Osaka City, central Japan. The site extends until the foot of the Plateau and it is surrounded by other important sites, such as the Naniwa Palace site about 1 kilometre north-west and the Morinomiya site (being famous for the Jomon Period shell midden) about 1 kilometre north. The Saisho-yama site was firstly discovered in 1938 due to the construction of the municipal swimming pool at Sanada-yama. It became famous for the discovery of a wooden artefacts suspected to be a dugout canoe of the Nara Period. The Kawachi Bay had been formed in the east of the site during the early Jomon Period, which derived to the Kawachi Lagoon, and then to the Kawachi Lake later, due to the development of the sandbar at the Osaka Bay. The investigations of the Saisho-yama site carried out in 1995 and 2002 revealed that the above mentioned wooden artefacts were excavated from the alluvium accumulated on the middle terrace formation which had been pared up to 3.7 metres below sea level during the middle and late Jomon Period when the sea level was lowering. The investigations also clarified the transition of sea level in this area.

The investigated area this year is located 60 metres south of the areas investigated in 1995 and 2002. Although the area is maintained in a form of terraced park now, it was originally on the slope, high in the west descending towards the east. The present ground surface is about 8 metres above sea level, and natural soil of the investigated area, which is the part of the middle terrace formation, was measured as 7.7 metres above sea level in the northern half of the investigated area and 7.0 metres above sea level in the southern half.

This investigation was carried out prior to the construction of the sewerage control facilities stretching from north to south. The investigated area extended from 2.5 to 6 metres in width and about 90 metres in length. A canoe-shape wooden object and a bowl-shape slug were unearthed from the Asuka Period ditch (SD201) at the southern edge of the investigated area. The ceramics dated from the Yayoi Period through the early and middle 7th century were also found. A pit dated back to the Nara period (SK201) overlapping SD201, contained several pieces of granite in about 1 metre long originated from the Rokko Mountains and mortar-shaped beads dated to the Kofun Period, as well as ceramics of the each age between the early Yayoi Period and the early / middle 8th century. Besides, dug out features at 5 spots and a ditch stretching from east to west were unearthed.

According to the above results, the investigated area had been continuously used as spaces of daily life and production for more than 1000 years, from the Yayoi Period through the Nara Period. It must be one of the reasons that the area was facing the Kawachi Lake at that time, being the strategic point for the transportation. The area is assumed to have been a part of the Naniwa Capital from the Asuka Period to the Nara Period, based on the economic activities contingent upon the Kawachi Lake.

報告書抄録

ふりがな	さいしょうやまいせきはっくつちょうさほうこく2
書名	宰相山遺跡発掘調査報告Ⅱ
副書名	2003年度真田山公園整備工事に伴う発掘調査報告書
編著者名	黒田慶一・田中清美・小倉徹也・平井和・藤田幸夫
編集機関	財団法人　大阪市文化財協会
所在地	〒540-0006　大阪市中央区法円坂1－1－35　　TEL 06－6943－6833
発行年月日	西暦　2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
さいしょうやまいせき 宰相山遺跡	おおさかしてんのうじくさなだやまちょう 大阪市天王寺区真田山町	27126	－	34° 40′ 15″	135° 31′ 45″	20030818 ～ 20031117	348㎡	下水管渠の布設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
宰相山遺跡	その他	弥生時代		弥生土器・石器
		古墳時代		土師器・須恵器・臼玉
		飛鳥時代	溝	土師器・須恵器・舟形木製品・椀形滓・上錘
		奈良時代	土壙・溝	土師器・須恵器
		江戸時代	土壙・溝	陶磁器
		近代	レンガ建物	陶磁器

原 色 図 版

SD201完掘状況（東から）

古代遺構断面（北から）

図　　版

図版一　北調査区の遺構

全景（北から）

SK101（北西から）

坪掘り１（西から）

図版二　南調査区の遺構（一）

全景（北から）

SD201・202・SK203断面
（北から）

SK201・SD202など
（南から）

図版三　南調査区の遺構（二）

SK201花崗岩出土状況
（南から）

SD201完掘状況
（東から）

SD201舟形木製品出土
状況（東から）

図版四　南調査区の遺構（三）

SD108木組み遺構
（東から）

SD107・108
（東から）

SD104～106
（東から）

図版五　南調査区の遺構（四）

SK105（東から）

SK105中央（東から）

騎兵連隊時代の全景
（中央にSB101、北から）

図版六　SD201出土遺物（一）

5

3

8

6

11

12

9

10

図版七　ＳＤ２０１出土遺物（二）

67

14

15

16

17

13

20

19

図版八　SD201とSK203出土遺物

156

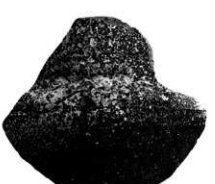
153

159

33

42

46



44

43

SD201：33・42～44・46、SK203：153・156・159

図版九　ＳＤ２０１出土遺物（三）

29

28

39

36

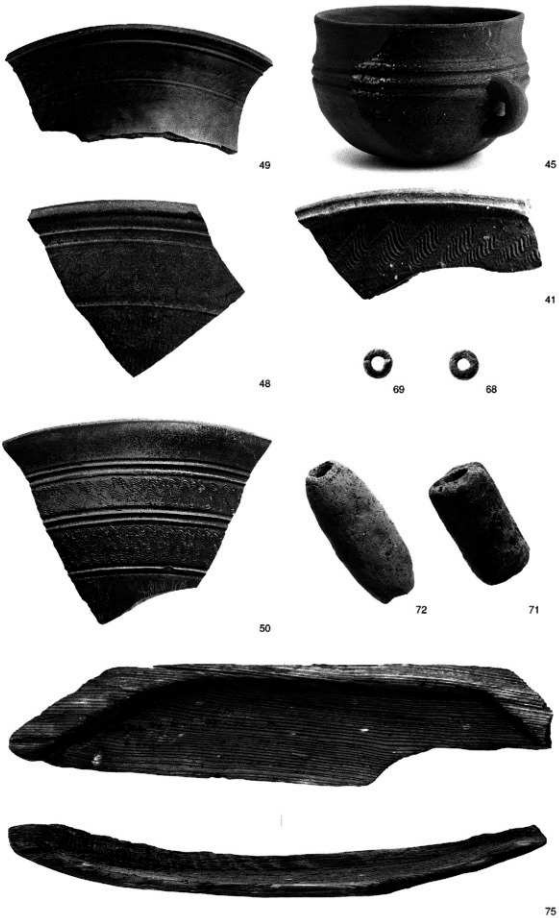
24

25

30

18

図版一〇　SD201出土遺物（四）



図版一一　ＳＤ２０１出土遺物（五）

57

56

63

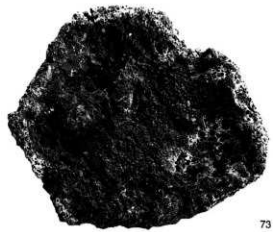
54

64

58

70

74



73

図版一二　SK201出土遺物（二）

76

77

85

93

79

80

83

82

89

88

図版一三　SK201出土遺物（二）

99

101

98

96

106

104

103

107

図版一四　SK201出土遺物（三）

117

120

109

110

127

121

115

111

125

図版一五　SK201出土遺物（四）

126

119

122

118

112

116

134

136

140

図版一六　SK201出土遺物（五）

137

138

142

139

130

129

131

181

180

図版一七　SK203出土遺物

144

154

145

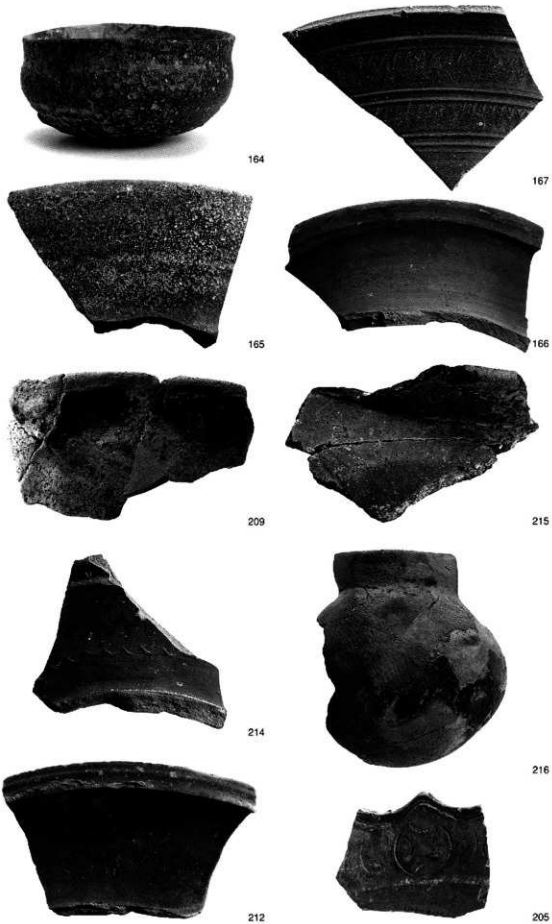
155

146

147

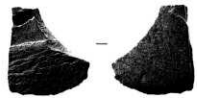
157

図版一八　その他の遺構出土遺物



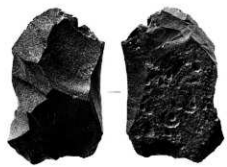
SD202：164～167、SK102：205、SK105：209・212・214～216

168



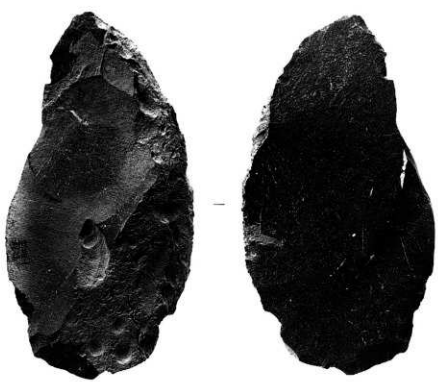
169

170



171

172



173

SD201：168～170・172、SK203：173、SK105：171

大阪市天王寺区 宰相山遺跡発掘調査報告Ⅱ
ISBN 4 －900687－76－ 6
2004年 3 月31日　発行©
編集・発行　財団法人 大阪市文化財協会
〒540－0006　大阪市中央区法円坂 1－1－35
(TEL.06－6943－6833　FAX.06－6920－2272)
http://www.occpa.or.jp/
印刷・製本　岡村印刷工業株式会社
〒558－0004　大阪市住吉区長居東 3－4－17

Archaeological Report
of
Saisho-yama site in Osaka, Japan

Volume II

A Report of Excavation
Prior to the Development of
Sanada-yama Park
in 2003

March 2004

Osaka City Cultural Properties Association

Archaeological Report
of
Saisho-yama site in Osaka, Japan

Volume II

A Report of Excavation
Prior to the Development of
Sanada-yama Park
in 2003

March 2004

Osaka City Cultural Properties Association

『宰相山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』正誤表

ページ数	行数	誤	正
本文33	図30 中	植 蔬	植 栽